

＜ 5歳クラス Ⅸ期 4・5月 ＞ 「幼児同士のかかわりを支える」

これまでの保育の様子

冬期間の室内遊びから外遊びに移行する4月、保育室はシンプルにし、テラスの近くに本棚を配置し、屋外の棚にすり鉢や虫かごを用意し、外遊びに意識が向くように環境構成を整えた。花の色水遊びや生き物捕まえなど、春の自然とのかかわりを求めて、園舎周りを散策する姿が見られた。カナヘビを友達と捕まえた際は、誰が飼うか言い合いになることがあった。教師は、飼育したい気持ちに共感しながら、どうしたらよいか考える援助を行ってきた。

4月の後半になると園舎裏にタケノコが生えていることに気付いた。タケノコは豊作の年と不作の年があり、5歳クラス児にとって初めての出会いである。その場にいた幼児で揺すったり根元を掘ったりし、タケノコが採れたときの表情は輝いていた。このような対象との出会いはいつでもあるわけではない。カンファレンスや職員室での情報交換で副担任や4歳クラス担任と相談し、他の友達や年下のクラスにも採りたい人がいることに気付けるようになることを願って、見守っていくことにした。

4月29日

A児：「ぼくもやりたい」

B児：「え…、あっちにもタケノコあったよ」

A児：「えー、でもまだ小さいよ」

B児：「明日、大きくなったら採れるよ」

A児：「えー、ぼくも入れてほしい」

C児：「でも、スコップがない…」

D児：「他のスコップ、やまさんが使っていたし…」

B児：「あっちのタケノコ、もうとってもいいんじゃない」

教師：「そういえば、さっき、そらさんが水をあげていたなあ。そらさんは、タケノコのお世話をしているのかなあ」

C児：「また生えてくるんじゃない」

A児：「どうしてぼくは、やっちゃだめなの？」涙目になる。

教師：「分かるなあ、先生もやりたいくらいだよ。どうしたらいいんだろうねえ」

しばらく沈黙が続く。

教師：「ねえEちゃん、どう思う？」虫探しをしていたE児に声をかける。

E児：「みんな、何歳？」

B児：「5歳だよ」

E児：「だったらさあ、5歳だから5回ずつ交代でやったらいいよ」

D児：「うーん…」

沈黙が続く。

C児：「やまさんのスコップ、もう使っていないかも…。探してくる！」

C児とD児が中央砂場にスコップを探しに行き、しばらくして園舎裏に戻って来る。

C児：「あったよー！」

A児：「ありがとう」

B児：「よし、掘ろう！」

教師：「さすが、うみさんだね！よかったね、Aちゃん」

タケノコを採る際に使う剣スコップをB児C児D児は一本ずつ持っていたが、A児は持っていなかった。B児らの会話から、スコップを持っている3人でタケノコを掘りたい気持ちが読み取れた。タケノコを自分たちで採りたいという譲れない思い、そして一緒にタケノコを採りたいというA児の思いという両者の思いを捉えた。まずは幼児同士のやりとりを見守ることにしたが、折り合いがつかない状態が続いた。教師は、自分の思いを伝えたり相手の思いを知ったりして、幼児の中から折り合いや解決の糸口を見出してほしいと願い、教師から提案することは極力避けた。ただ、他のタケノコを採ったらどうかという幼児の言葉に対しては、それまでに職員間で共有していた方向性をもとに、自分たち以外にもタケノコに興味がある存在がいることに気付けるように、3歳クラス児とタケノコのかかわりを知らせた。

膠着状態がさらに続いたため、近くで遊びながらやりとりを聞いていたE児の考えを聞いてみた。折り合いを付ける1つの方法を知ることができたが、幼児の中で納得するものではなかったのだろう。仮に教師がその場を離れたら、A児は他の幼児たちの思いに押し切られたかもしれない。教師はその場に立ち会い、時間がかかっても、自分たちが納得する方法が見つかるまで待とうと決めた。掘り始めるまでかなりの時間がかかったが、幼児の表情からは、もどかしさや葛藤、気まずさや安堵と様々な感情が伺えた。遊びを通して、様々な感情を経験することは、相手の思いを知ったり、折り合いを付けたりといった、かかわる力の育

ちにつながっていくと考える。他の遊びにおいても、思いを伝え合うことや、自分たちで解決する経験を大切にしていこうと話し合った。

5月2日

サッカーボールを蹴って遊んでいた幼児たちが水分補給のためテラスに戻って来る。

F児：「ぼく、一回しか蹴っていない。もっと蹴りたい！」

C児：「昨日やったとき、いっぱい蹴っていたからいいじゃん」

F児：「でも、やりたい。先生、ボールもう1個ないの？」

教師：「ないみたいなのよねえ。どうしたらいいのかなあ」

B児：「Fちゃんあのね、『パス』って言うと、ボールをもらえるよ。でも、手は使わないよ」

教師：「Fちゃん、『パス』って言うといいみたいです」

F児：「分かった」

教師：「Bちゃん、いい考えだね」

B児：「うん。でもボール、もう1個あればなあ」

サッカーボールで遊び初めて3日目。まだチームやルールらしいものはなく、それぞれがボールを追いかけたり蹴ったりと、自分のやりたいイメージで遊んでいた。もっと蹴りたいと訴えるF児に対して、B児がもっと蹴れる方法を伝える姿があり、教師は称賛する言葉をかけた。F児だけでなくB児からも、もっと蹴りたいという思いが読み取れた。振り返りタイムでは、サッカーボールを増やすことはしないことを確認した。やりたい思いや遊びのイメージのすれ違いを経験しながら、ルールを自分たちでつくったり、ルールを共有したりしながら遊ぶよさが感じられたらと援助の方向性を共有した。

5月16日

G児：「先生、緑の小道に行きたい」

教師：「何かしたいのかな。もう少し詳しく教えてください」

G児：「あのね、タケノコがすごく長くなっているのを見つけたの。だから、採ってみたいんだ」

B児G児：「ぼくも採りたい」

教師：「分かりましたよ」

1本ずつ剣スコップをもって園舎裏へ行き、タケノコの根元を掘り始める。

B児：「あれ、全然掘れない」

G児：「本当だ、これじゃ、無理」

教師：「固そうだね。どうする？」

B児：「あ！あれがいいんじゃない。ギコギコするやつ。4歳クラスにあったよ」

G児：「あー、ダンボールカッター？」

B児：「うん、そうそう」

教師：「ダンボールカッターなら、5歳クラスにもありますよ」

B児：「使いたい」

教師：「いいですよ。でも、ここはせまくて危ないから持ってくるのは1本でいいですか？」

G児：「いいよ」

B児：「みんなで交代で使おうよ」

G児H児：「うん、そうしよう」

5歳保育室にダンボールカッターを取りに戻る。

A児：「何するの？」

F児：「長いタケノコが固くて、ダンボールカッターで切ってみるんだ」

A児：「ぼくも、やってみたい」

B児：「いいよ。ぼくと、HちゃんとGちゃんの次でいい？」

A児：「うん。ありがとう」

I児：「いいなあ、ぼくにもやらせて」

B児：「じゃあ、HちゃんとGちゃんとAちゃんの次ね」

他の遊びをしながら、タケノコへの興味は持続していた。この日も、一人が1本ずつ剣スコップを持ってタケノコ採りに出かけたが、刃が立たず、ダンボールカッターで試すことになった。教師は安全面から1本しか持っていけないことを伝えた。興味をもった幼児が次々と仲間入りを求めてきたとき、初めからタケノコ採りをしていた幼児たちがどうするか教師は見守っていた。言い合いになるかもしれない。しかし、B児は後から来た友達を受け入れ、交代で行うことを提案した。友達のやりたい思いを知って、自分にできることをする姿にB児の育ちを感じた。1本しかないタケノコ、1本しか持っていけないダンボールカッターに

対し、切ってみたい幼児は大勢になった。しかし、B児が提案し、その場にいた幼児もそれを受け入れたことで、同じ目的を共有する仲間として、順番が来るまで待ち、タケノコが切れた喜びをみんなで共有することにつながった。教師は、目を輝かせてタケノコを運ぶ様子を見守りながら、相手の思いを受け入れることで、みんなで楽しく遊ぶことができるという経験につながったと捉えた。

考察

遊びにおけるトラブル場面において、自分の思いを伝えるとともに相手の思いを知ることによって、かかわり方を考え、社会性の育ちへとつながっていくと考える。これまでのカンファレンスにおいて、トラブルは相手とのかかわりを学ぶ大切な機会として共通認識を得てきた。5歳クラスに進級し、幼児理解を進める中で、トラブル場面における幼児の姿を振り返りタイムで共有してきた。話し合う中で、思いを伝えることに加えて、相手の思いを知ったり、受け入れたりしていけるように、丁寧に援助をしていこうと話していた。それは、教師側がよいと思うかかわり方を一方的に伝えるものではない。教師は、幼児の思いに耳を傾けながら、自分たちで解決することを願って、ときには寄り添い、ときには仲介し、ときには一緒に悩む。時間がかかることもあるが、教師が焦らずにその場に立ち会うことが、自分なりに考えたり、折り合いを付けたりにして解決していく姿を支えることにつながると考える。

< 5歳クラス Ⅸ期 4・5月 > 「幼児同士のかかわりを支える」

これまでの保育の様子

冬期間の室内遊びから外遊びに移行する4月、保育室はシンプルにし、テラスの近くに本棚を配置し、屋外の棚にすり鉢や虫かごを用意し、外遊びに意識が向くように環境構成を整えた¹⁾。花の色水遊びや生き物捕まえなど、春の自然とのかかわりを求めて、園舎周りを散策する姿が見られた。カナヘビを友達と捕まえた際は、誰が飼うか言い合いになることがあった。教師は、飼育したい気持ちに共感しながら、どうしたらよいか考える援助²⁾を行ってきた。

4月の後半になると園舎裏にタケノコが生えていることに気付いた。タケノコは豊作の年と不作の年があり、5歳クラス児にとって初めての出会いである。その場にいた幼児で揺すったり根元を掘ったりし、タケノコが採れたときの表情は輝いていた。このような対象との出会いはいつでもあるわけではない。カンファレンスや職員室での情報交換で副担任や4歳クラス担任と相談し、他の友達や年下のクラスにも採りたい人がいることに気付けるようになることを願って、見守っていくことにした³⁾。

4月29日

A児：「ぼくもやりたい」
B児：「え…、あっちにもタケノコあったよ」
A児：「えー、でもまだ小さいよ」
B児：「明日、大きくなったら採れるよ」
A児：「えー、ぼくも入れてほしい」
C児：「でも、スコップがない…」
D児：「他のスコップ、やまさんが使っていたし…」
B児：「あっちのタケノコ、もうとつてもいいんじゃない」
教師：「そういえば、さっき、そらさんが水をあげていたなあ。そらさんは、タケノコのお世話をしているのかなあ⁴⁾」
C児：「また生えてくるんじゃない」
A児：「どうしてぼくは、やっちゃだめなの？」涙目になる。
教師：「分かるなあ、先生もやりたいくらいだよ。⁵⁾どうしたらいいんだろうねえ」しばらく沈黙が続く。
教師：「ねえEちゃん、どう思う？」⁶⁾虫探しをしていたE児に声をかける。
E児：「みんな、何歳？」
B児：「5歳だよ」
E児：「だったらさあ、5歳だから5回ずつ交代でやったらいいよ」
D児：「うーん…」
沈黙が続く。
C児：「やまさんのスコップ、もう使っていないかも…。探してくる！」
C児とD児が中央砂場にスコップを探しに行き、しばらくして園舎裏に戻って来る。
C児：「あったよー！」
A児：「ありがとう」
B児：「よし、掘ろう！」
教師：「さすが、うみさんだね！よかったね、Aちゃん」

タケノコを採る際に使う剣スコップをB児C児D児は一本ずつ持っていたが、A児は持っていなかった。B児らの会話から、スコップを持っている3人でタケノコを掘りたい気持ちが読み取れた。タケノコを自分たちで採りたいという譲れない思い、そして一緒にタケノコを採りたいというA児の思いという両者の思い

コメントの追加 [h1]: 外遊びに移行する時期の環境構成に対する共感を得た。教師は、その時期にふさわしい体験や遊びにつながるように意図して室内や屋外の環境を構成している。また幼児が遊ぶ姿をもとに、職員で話し合い、更新していくことも大切になっている。

コメントの追加 [h2]: 自分以外の存在に気付けるような援助が、幼児同士のかかわりや遊びの伝承につながるというコメントが多かった。グミヤクリの実のように数多く採れるものであれば、多くの幼児が触れることができる。タケノコは時期や採れる数が限られているからこそ、職員間でどのように援助していくかの方向性を確認することが大切であると考えた。

¹⁾ 保育室をシンプルにし外遊びへ意識が向かう環境構成の大切さ(f) 遊びが広がるようにと願った、あえて「シンプル支援」に共感できる。どんな遊びが生み出されるのか期待がふくらむ(g) 外に目を向けさせる(h)

²⁾ 言い合いのときはどうしたらいいか考えることができるよう援助(h)

³⁾ 異年齢のかかわりの種になる援助 (b) 遊びの中でのやりとりを大切にしている(c) 育ってほしい方向性を教師がしっかりもっていることが大切だと考える(d) 遊びの伝承を大切にしている(f) 年長児への的確な支援に共感できる。年長児だからこそ自分たち以外の存在や気持ちにも少しずつ気付かせていきたい(g)

⁴⁾ 年下の幼児の思いに気付けるようにしている (a) 気付けるようにする声かけ(h)

⁵⁾ 共感することでA児の思いを受け入れるとともに他の幼児がA児の思いに気付けるようにしている (a)

⁶⁾ 他の幼児に聞き、多様な考えに触れられるようにしている(a)

を捉えた。まずは幼児同士のやりとりを見守る⁷ことにしたが、折り合いがつかない状態が続いた。教師は、自分の思いを伝えたり相手の思いを知ったりして、幼児の中から折り合いや解決の糸口を見出してほしいと願い、教師から提案することは極力避けた⁸。ただ、他のタケノコを採ったらどうかという幼児の言葉に対しては、それまでに職員間で共有していた方向性をもとに、自分たち以外にもタケノコに興味がある存在がいることに気付けるように、3歳クラス児とタケノコのかかわりを知らせた⁹。

膠着状態がさらに続いたため、近くで遊びながらやりとりを聞いていたE児の考えを聞いてみた。折り合いを付ける1つの方法を知ることができたが、幼児の中で納得するものではなかったのだろう。仮に教師がその場を離れたら、A児は他の幼児たちの思いに押し切られたかもしれない。教師はその場に立ち会い、時間が経ちながらも、自分たちが納得する方法が見つかるまで待とうと決めた¹⁰。掘り始めるまでかなりの時間が経ちながらも、幼児の表情からは、もどかしさや葛藤、気まずさや安堵と様々な感情が伺えた。遊びを通して、様々な感情を経験することは、相手の思いを知ったり、折り合いを付けたりといった、かかわる力の育ちにつながっていく¹¹と考える。他の遊びにおいても、思いを伝え合うことや、自分たちで解決する経験を大切にしていこうと話し合った。

5月2日

サッカーボールを蹴って遊んでいた幼児たちが水分補給のためテラスに戻って来る。
F児：「ばく、一回しか蹴っていない。もっと蹴りたい！」
C児：「昨日やったとき、いっぱい蹴っていたからいいじゃん」
F児：「でも、やりたい。先生、ボールもう1個ないの？」
教師：「ないみたいなのよねえ。どうしたらいいのかなあ」
B児：「Fちゃんあのね、『パス』って言うと、ボールをもらえるよ。でも、手は使わないよ」
教師：「Fちゃん、『パス』って言うといいみたいです」
F児：「分かった」
教師：「Bちゃん、いい考えだね」
B児：「うん。でもボール、もう1個あればなあ」

サッカーボールで遊び初めて3日目。まだチームやルールらしいものはなく¹²、それぞれがボールを追いかけたり蹴ったりと、自分のやりたいイメージで遊んでいた。もっと蹴りたいと訴えるF児に対して、B児がもっと蹴れる方法を伝える姿があり、教師は称賛する言葉をかけた。F児だけでなくB児からも、もっと蹴りたいという思いが読み取れた。振り返りタイムでは、サッカーボールを増やすことはしないことを確認した¹³。やりたい思いや遊びのイメージのすれ違いを経験しながら、ルールを自分たちでつくったり、ルールを共有したりしながら遊ぶよさが感じられたらと援助の方向性を共有した¹⁴。

5月16日

G児：「先生、緑の小道に行きたい」
教師：「何かしたいのかな。もう少し詳しく教えてください¹⁵」
G児：「あのね、タケノコがすごく長くなっているのを見つけたの。だから、採ってみたいんだ」
B児G児：「ばくも採りたい」
教師：「分かりましたよ」
1本ずつ剣スコップをもって園舎裏へ行き、タケノコの根元を掘り始める。
B児：「あれ、全然掘れない」
G児：「本当だ、これじゃ、無理」
教師：「固そうだね。どうする？」
B児：「あ！あれがいいんじゃない。ギョギョするやつ。4歳クラスにあったよ」
G児：「あー、ダンボールカッター？」
B児：「うん、そうそう」
教師：「ダンボールカッターなら、5歳クラスにもありますよ」
B児：「使いたい」
教師：「いいですよ。でも、ここはせまくて危ないから持ってくるのは1本でいいですか？¹⁶」

コメントの追加 [h3]: 幼児同士でかかわりを深めることや言葉による伝え合いを大切にしている点に共感が多かった。これまでもトラブルが起きたとき、教師がすぐに仲裁に入るのではなく、お互いの思いを伝え合い、自分たちで解決しようとする気持ちを認めてきた。そのため、この場面でも、まずは自分の思いを伝えることや相手の思いを知ろうとする姿を大切にした。

コメントの追加 [h4]: 待つことによって、さらに考える状況をつくり、主体性を育むことにつながるといったコメントがあった。待つことは、幼児自ら動き出したり、幼児自身の力で考えたり、解決したりする機会を保障することとも言える。その積み重ねが、幼児のよりよく生きる力につながっていくと考える。

コメントの追加 [h5]: 心の動きが幼児の育ちにつながることへのコメントがあった。園生活では、友達と一緒に喜んだり、悲しんでいる友達をなぐさめたりといった姿が見られる。様々な感情を経験することは、相手の思いに共感したり、柔軟に対応したりするなどのよりよいかかわりにもつながると考える。

コメントの追加 [h6]: 道具の数を限定することが、幼児の思考を促し、友達同士でかかわる機会になることへの共感を得た。教師一人で決めたことではなく、幼児の姿をもとに振り返りタイムで話し合っただけで決めたことに意味がある。環境構成に込めた願いを確認することで、援助の方向性の共有につながったと考える。

⁷ 幼児が自ら考えられるように支えている(a)

⁸ 願いをもって見守っている (a) 幼児同士のかかわりを深めるための援助(b) 子どもたち同士で思いを伝え合い、解決していけるように教師は提案をしない(f) 我慢(?)待ち(?)の支援(g)

⁹ 自分の思いだけでなく友達の思いや年下の思いに気付ける援助(b)

¹⁵ 幼児の思いを読み取る (a)

G児：「いいよ」
B児：「みんなで交代で使おうよ」
G児H児：「うん、そうしよう」
5歳保育室にダンボールカッターを取りに戻る。
A児：「何するの？」
F児：「長いタケノコが固くて、ダンボールカッターで切ってみるんだ」
A児：「ぼくも、やってみたい」
B児：「いいよ。ぼくと、HちゃんとGちゃんの次でいい？」
A児：「うん。ありがとう」
I児：「いいなあ、ぼくにもやらせて」
B児：「じゃあ、HちゃんとGちゃんとAちゃんの次ね」

他の遊びをしながら、タケノコへの興味は持続していた。この日も、一人が1本ずつ剣スコップを持ってタケノコ採りに出かけたが、刃が立たず、ダンボールカッターで試すことになった。教師は安全面から1本しか持っていけないことを伝えた。興味をもった幼児が次々と仲間入りを求めてきたとき、初めからタケノコ採りをしていた幼児たちがどうするか教師は見守っていた¹⁷⁾。言い合いになるかもしれない¹⁸⁾。しかし、B児は後から来た友達を受け入れ、交代で行うことを提案した。友達のやりたい思いを知って、自分にできることをする姿にB児の育ちを感じた¹⁹⁾。1本しかないタケノコ、1本しか持っていけないダンボールカッターに対し、切ってみたい幼児は大勢になった。しかし、B児が提案し、その場にいた幼児もそれを受け入れたことで、同じ目的を共有する仲間として、順番が来るまで待ち、タケノコが切れた喜びをみんなで共有することにつながった。教師は、目を輝かせてタケノコを運ぶ様子を見守りながら、相手の思いを受け入れることで、みんなで楽しく遊ぶことができるという経験につながったと捉えた²⁰⁾。

考察

遊びにおけるトラブル場面において、自分の思いを伝えるとともに相手の思いを知ることによって、かわり方を考え、社会性の育ちへとつながっていくと考える。これまでのカンファレンスにおいて、**トラブルは相手とのかわり方を学ぶ大切な機会²¹⁾として共通認識を得てきた**。5歳クラスに進級し、**幼児理解を進める中で、トラブル場面における幼児の姿を振り返りタイムで共有してきた**。話し合う中で、思いを伝えることに加えて、相手の思いを知ったり、受け入れたらしていけるように、**丁寧に援助をしていこう²²⁾と話していた**。**それは、教師側がよいと思うかわり方を一方的に伝えるものではない**。教師は、**幼児の思いに耳を傾けながら、自分たちで解決することを願って、ときには寄り添い、ときには仲介し、ときには一緒に悩む**。時間がかかることもあるが、**教師が焦らずにその場に立ち会うことが、自分なりに考えたり、折り合いを付けたりして解決していく姿を支えることにつながると考える²³⁾**。

コメントの追加 [h7]: 思いを受け入れる経験や協同作業、成功体験を増やす援助など様々な視点からのコメントがあった。思いがすれ違うこともあれば、思いを受け入れて楽しく遊ぶこともある。葛藤場面を経験しているからこそ、仲間とかかわり合う心地よさも感じられるのではないか。どの経験にも意味があり、長期的に見ると自分たちの力で解決する姿につながっていくと考える。

コメントの追加 [h8]: トラブルを通して、考え学んでいくことへの共感が多かった。振り返りタイムや水曜カンファレンスで、様々なトラブルにおいて、ことばで思いを伝え合い、折り合いを付けていった姿を職員間で共有している。トラブルは学びにつながることを共有しているため、「待つ」援助を大切にしたいと考えた。

コメントの追加 [h9]: 幼児の力を信じて寄り添う大切さや、焦らないで立ち会うことへの共感を得た。本園の評価観の一つに「幼児の自ら育とうとする力を支える」がある。すぐに解決しなくても、ことばで伝え合ったり、よりよい方法を考えたりする姿を大切にすることで幼児自ら育とうとする姿につながっていくと考える。

- ¹¹⁾ プラスの感情だけでなくマイナスの感情を感じることも大切(a) 心を揺り動かすことが幼児の育ちにつながる。見守る援助は心の動きをつくるのではないかと考えた(c) 今年度の5歳クラス児に、やさしさや寛容さは特に身に付けてほしい力だと考える(g)
- ¹²⁾ ルールを自分たちのイメージを共有しながら決めていく(f)
- ¹³⁾ 数を限定することで幼児の思考が促される(a) 振り返りタイムでの情報共有を活かした援助の方向性の確認、共有(b) 道具を出さないことで意図的にかかわりをつくる種まきになる(c)
- ¹⁴⁾ 子どもは自分たちでルールをつくっていきける。すなわち、自ら育とうとする存在であるという見方をしている教師のまなざしを感じた(c) 職員同士の共有(d)
- ¹⁵⁾ 幼児の思いを読み取る (a)
- ¹⁶⁾ 数の制約によりかわり方を支えている(a) 1本しか持っていけない理由を伝えることで納得し「じゃあ、どうしようか」と試行錯誤につながっていると考える(d)
- ¹⁷⁾ 幼児が主体的に行動することを願っている(a)
- ¹⁸⁾ 言い合いは育ちへの一過程であると捉えているからこそ見守れる(c)
- ¹⁹⁾ 教師の日々の丁寧な見取りがあってこそ見える育ちの部分(g)
- ²⁰⁾ 相手の思いを受け入れる経験が楽しさにつながっている(a) 材が少ないことにより生まれた思いやりと協同作業(f) 成功体験を増やしていくと日々考え、支援している担任・副担任の姿勢に共感できる(g) このような経験を見守ることができるのが教師の醍醐味だと思う(h)
- ²¹⁾ トラブルを通していろいろな感情を感じ、かわり方を学ぶ機会として捉えている(a) 心の動きがあるからこそ育ちがあるという考え方(c) トラブルは教師の思いを伝える場ではなく、子どもたち同士の思いを支える場なのだと実感した(d) トラブルはチャンス。相手とのかわり方を学ぶ、考える大切な機会(f)
- ²²⁾ 幼児一人一人を大切に、丁寧ににかかわっている(a)
- ²³⁾ 幼児が主体的に考え、かわり合うことで学ぶ環境になっている(b) 幼児の自分でできる力を信じ、寄り添う教師の姿(c) 解決しようとするのではなく寄り添う大切さ(f) 焦らないで立ち会うことが、どうなるうとも自分で考えることにつながるのだと思った(h)

<5歳クラス X期 6・7月> 「遊びの広がりを支える援助」

これまでの保育の様子

5月から6月にかけて、石の発掘遊びをきっかけに、数名の女児を中心に、石磨き、宝石屋さんへと遊びが広がり、これまでになかった遊びへと発展していた。一方で、これといった遊びが見付からなく、何となく遊具で遊んでいる幼児の姿も話題にしていた。3歳、4歳クラスのときは、年上の幼児がやっている遊びが刺激となり、真似をしながら遊びが広がっていくことがよくあるが、5歳クラスになるとこのような遊びの出会いが少なくなる。5歳クラス児にとって、新しいものとの出会いが刺激となり、「面白そう」「やってみたい」という思いが生まれ、遊びが広がっていくのではないかとカンファレンスで話し合った。そして、進級して年長児としての生活にも慣れてきたこの時期だからこそ、新たなものとの出会いや、出会ったときの援助を大切にしていこうと方向性を共有した。

早くも真夏のような気候になった6月下旬、ビニール袋に水をためたものを地面に投げて遊んでいる幼児がいた。水が地面に広がる様子を見て「爆弾だ」「爆発だ」と言って遊んでいた。そこに通りかかった4歳クラス副担任が「ずっと前のうみさんは、ペットボトルで爆発をしていたような…」とつぶやいた。幼児は、「やってみよう」とペットボトルに水を入れて、地面に投げるものの、爆発のような現象は起こらなかった。その日の片付け中、水道ホースをペットボトルに差し込んで水をためていると、ペットボトルが膨らみ、プシュッとホースが外れる現象が起こった。「あれ、膨らんだ」「これが爆発？」とつぶやいた様子を振り返りタイムで担任と副担任とで情報共有した。ここ数年、ペットボトルを飛ばす遊びをしていることはなく、担任・副担任も経験したことがなかった。そこで、ペットボトルが爆発する遊びはどのようなものなのか、過去の資料を参考に、担任・副担任とで数種類のペットボトルで試してみた。失敗して水がかかったり成功したりと教師も自ら体験してみることでペットボトルとホースの組み合わせによる遊びの可能性を感じた。この日の遊びや片付けでの出来事をきっかけに、新たな楽しみを見出して、遊びが広がっていくかもしれないと話し合い、翌日の環境構成としてペットボトルを1本、水道の近くに置いておくことにした。

6月22日

H児：「先生、これは何？」

教師：「それは、昨日、Iちゃんたちが遊んでいたペットボトルだね。そういえば、片付けのときに水を入れたら、ペットボトルが膨らんで、プシュッってなったって言っていたよ」

H児：「へえ、ぼくもやってみたいな。どうやっていたの」

教師：「確か、ペットボトルの中にホースの先を入れていたみたいだったなあ」

H児はコンテナの上にペットボトルを置いて、ホースの先を入れる。

H児：「先生、ぼくが押さえているから、水を出して」

教師：「分かりましたよ」蛇口をひねる。

H児：「あ！ちょっと動いた！」

教師：「本当だ！なるほど、おもしろいね！」

H児：「もう1回やってみる。先生、また水を出してください」

何度か試したあと、ペットボトルを手にとって試す。するとペットボトルが水の勢いとともに足元の少し先に落ちる。

H児：「わあ、ちょっと飛んだ！」2、3回繰り返す。

教師：「すごいね！先生もやってみたいな」

H児：「いいよ。じゃあ、ぼくが水を出すね」

教師が、ペットボトルを上に向けて試すと、ペットボトルが約2.5mの園庭の柵を飛び超す。

H児：「えー！あっちに行っちゃった！何で！」

教師：「何でだろう。びっくりした！」H児と一緒に柵の外へ出て、ペットボトルを回収に向かう。

I児：「何しているの」

教師：「ペットボトルが森の方に飛んで行っちゃったから、取りに行くところなの」

I児：「へえ、ぼくもやりたい」

H児：「いいよ。そうだ、先生は、背が高いからあんなに飛んだんだよ」

H児はビールケースを取りに行き、その上に立って、ペットボトルにホースをセットする。

H児：「やったー、飛んだ！」

I児：「次はぼくだよ。水、出して」

興味をもった幼児が次々に仲間入りする。飛ばしたい人と水道から水を出したい人に分かれ、順番に試す。

I児：「あれえ、あんまり、飛ばないなあ」

H児：「あのね、ホースをペットボトルの中に入れたら、そのすぐ近くを持つといいんだよ」

I 児たちは、遠くまで飛ばなくても、水がかかっても笑顔で片付けまで遊び続ける。

ペットボトルを水道の近くに置いておくと、興味をもったのは、前日にペットボトルの遊びをしていなかったH児であった。前日に遊んでいた幼児とつなぐ援助を考えたが、周りにいなかったため、H児の試したい思いに寄り添って、教師も側と一緒に遊びながら、H児が感じる面白さに共感していこうと考えた。H児と教師の2人で遊ぶ時間がしばらく続いた。遊びが続いていくことで、その様子に興味をもった幼児が仲間入りして、かかわりながら遊びが広がっていくかもしれないと思い、一緒に遊び続けた。ペットボトルにホースで水を入れて遊ぶことは、H児にとって、見たことも経験したこともない初めての遊びである。ペットボトルは少し動かす、水があふれた勢いでホースが外れるくらいであったが、遊びへの興味が継続するように、ペットボトルの動きにおもしろさを感じられるような言葉をかけた。また、実際にペットボトルが遠くまで飛ぶことを知ることで、この遊びのおもしろさに気付くきっかけになるのではないかと考えた。そこで、H児が何回も試した後のタイミングで、教師もペットボトルを飛ばす遊びに加わった。前日の降園後に担任と副担任とで、試していたこともあり、ペットボトルは思った以上に高く飛んだ。驚きながら柵の外へペットボトルを取りに行くH児と教師の姿を見て、興味をもったI児らが仲間入りすることにつながった。仲間が増えたタイミングで教師はH児と一緒に遊ぶ援助から見守りを中心とした援助に切り替え、幼児同士のかかわりで遊びが進んでいくようにした。

振り返りタイムでは、遊びの様子を共有するとともに、H児と1対1で長くかかわったことや教師がペットボトルを飛ばしたことは幼児の自主性を大切にする援助として適切であったかという思いも話した。この日の片付けの時間までたくさんの幼児が夢中になってから遊ぶ姿につながったことと照らし合わせ、状況に応じて、教師が遊びに加わる援助をすることも、その後の遊びの広がりにつながっていくのではないかと話し合った。

6月23日

H児：「やったー！飛んだ！」

I児：「あれ、また落ちちゃった」

H児以外の幼児が試しても、ほぼ足下近くに落ちることに気付いた副担任が、近くを通りかかった担任にその様子を伝える。前日からの様子をふまえ、自分が使っているペットボトル以外のものも選べるようにしてみようと話し合う。担任はプラスチックかごにペットボトルを数本入れて、近くにそっと置く。

J児：「これ使っているのかなあ？」

教師：「いいですよ」

J児：「こっちにしよう」手にしていたペットボトルとかごの中のものを交換して試す。

J児：「わあ、飛んだ！」

教師：「すごい！あんなところまで飛んでいったよ」

I児：「えーどうして？」

J児：「分からないけど、このペットボトルにしたら飛んだよ」

I児：「ぼくも、違うのにしようかな」かごの中のものと交換する。

I児：「あれ、やっぱり飛ばない」再度、交換して試す。

I児：「やったー！飛んだ！ねえ、どこまで飛んでいった？」

教師：「あの木の枝の上まで飛んでいったよ！すごいねIちゃん！」

I児：「うん！もう1回やろう！」

翌日、H児たちは園庭に出るとすぐにペットボトルを飛ばす遊びを始めた。幼児同士で遊びを進めていたため、教師は遊びに加わることはしないで遊ぶ様子を見守っていた。前日は、新しい遊びへの興味やペットボトルがホースから外れる際に水がかかる心地よさがあり、飛んでも飛ばなくても、笑顔で遊び続ける姿を捉えていた。H児はペットボトルが飛ぶたびに喜び、どうやるとよく飛ぶのか友達に教えていた。H児以外の幼児は、何回試しても足下に落ちてしまい、物足りなさを感じ始めている様子を読み取っていた。その様子に気付いた副担任と担任とで情報を共有した。そこで、持ち方や水の出し方だけではなく、ペットボトルの口径でよく飛ぶものとそうではないものがあることを話し合った。幼児は、教師に要望して出してもらったペットボトルを自分の遊ぶ道具として大事に使っていた。そのため、幼児が試行錯誤する範囲に、ペットボトルを選択することは入っていないのだと捉えた。そこで、H児以外にも、ペットボトルが飛んだときのうれしさを味わい、もっとやりたいという思いにつながるように、自由に使えるペットボトルを用意することにした。

振り返りタイムでは、ペットボトルを選択できる環境構成にしたことで、多くの幼児がペットボトルが飛んだことに達成感を味わい、夢中になって遊びを続け、もっと高く飛ばそうと、持ち方を工夫していたことを共有した。また、I児を中心に、ペットボトルがどこまで飛んだかという高さや長さへの関心が芽生えていることから、これからの幼児のやりたい思いに合わせて、どのような援助をしていくか考えていくことにした。

6月30日

H児：「うーん、クモの巣に届かない」 枝をキウイ棚のクモの巣に上に向かって動かす。

教師：「どうしたら、届くかなあ」

I 児：「そうだ！ロケットランチャーだ！」

H児：「そうだよ！やろう、やろう！先生、ペットボトル貸してください」

教師：「棚の中のかごに入っていますよ」

I 児：「よし、これにしよう」 よく飛ぶペットボトルを手にする

H児：「先生、水を出してください」

教師：「いいですよ」

I 児：「上がった！もう1回やろう」 ホースをペットボトルに差す。

H児：「わあ！あっちに飛んで行っちゃった」

教師：「すごいね！あんなところまで飛んでいったの！」

I 児：「すごく飛んだ！何メートル飛んだのかなあ」

教師：「そうだねえ。どうやったら、分かるのだろうね」

I 児：「そうだなあ。あ、巻尺！巻尺って、幼稚園にある？」

教師：「巻尺かあ。先生たちの部屋にあったかもしれないなあ」

I 児：「行ってみよう」

H児とI 児で職員室に行き、職員から巻尺を借りる。教師から教えてもらい、巻尺の赤い数字で飛んだ長さを確かめていると、次々に仲間が入って来る。

K児：「ぼくが、こっちを持つよ」

H児：「分かった。ぼくがペットボトルの方に行くね」

I 児：「何メートルかなあ。えーと10メートルだ！」

J 児：「今度は、ぼくが飛ばしたい」

H児：「いいよ。そうしたら、また測ろうよ」

J 児：「I 君、水出して」

I 児とH児が、クモの巣を取るためにペットボトルを飛ばすことになった。一番よく飛ぶと思うペットボトルを選んで飛ばすと、遠くまで飛び、どのくらい飛んだのか知りたいという思いにつながった。先週から何度も試して、よく飛んだときの達成感を得て、新たな目的が共有されるという姿に遊びの広がりや5歳クラス児の育ちを感じた。飛んだ距離を知りたいというI 児の思いを支えたいと考え、どうやったら分かるか問う言葉かけをした。先週の様子から、教師は、援助のレパトリーとして、目印を付けたり、線を引いたりする姿を想定して使える道具を用意していた。定規や巻尺も幼稚園にあるが、初めから使うことは考えていなかった。そのため、I 児が「巻尺」と言ったとき、これまで遊びの中で使ったことのなかった道具を提供するかどうか迷った。しかし、I 児がメートルという数の単位に興味をもっていたことと幼児がやりたい思いを抱いているときに、その思いをきっかけとして新しい道具と出会うことがよいのではと考え、巻尺を事務室に一緒に借りに行くことにした。やりたい思いに寄り添い、巻尺を出したことで、ペットボトルを飛ばして遊ぶ楽しさに加えて、どのくらい飛んだか確かめたり、もっと飛ぶように何度も試しながら記録を伸ばそうと挑戦したりする遊びへと広がった。また、水道の蛇口を操作する役や巻尺の両端を持つ役など、幼児同士で声をかけ合って、協力しながら主体的に遊びを進める姿につながったと捉えた。

考察

教師は、この時期の幼児が自ら興味をもって新しいものに出会い、やりたい思いが生まれ、遊びが広がることを願っている。遊びの広がりとともに、工夫したり、何度も試行錯誤したり、これまでの経験とつなげたりするなど様々な育ちにつながっていくと考える。そのため、新たなものに興味をもつきっかけとして新たな材を出すなどの環境構成を行っている。今回、過去の遊びの様子を知る職員から、ペットボトルで爆発ができることを幼児と聞いたとき、これも新たな興味へのきっかけになるのではないかと考えた。担任・副担任とで実際に試してみて、この機会を活かしていけるように援助をしていこうと方向性を確認した。しかし、新しいものとの出会いがあれば、常に遊びが広がるとは限らない。幼児の様子を見守りながら、何に興味があり、どこに楽しみを見出しているのか、楽しみ方に変化の兆しがあるのかなどを読み取ることを大切にしてきた。そして、その状況に適した援助を考えて、遊びに加わったり、環境を更新したりすることで、遊びが継続しながら広がっていくのだと考える。

水曜カンファレンスでもこの遊びの経緯を話題に出した。実際に幼児が遊ぶ様子を見ていた他クラスの職員から、「幼児同士で教え合っていた」「3歳クラス児が『おもしろいことをしているよ』」と言いに来て、遊びを見て楽しんでいた」といった意見があった。5歳クラス児にとっては、試行錯誤しながら友達と協同的に遊びを進めていく姿につながった。また、周りで見ていた年下の幼児にとっても、新たな遊びに出会い、興味の広がりにつながったと捉えた。

年間指導計画のX期に『幼児の遊びへの新たな意欲をかき立てるため、教師が遊びのモデルになったり、

竹やシロツメクサなど季節感のある素材を遊びに提示したりする』¹⁾とある。今回、遊びの状況の中で、教師がペットボトルを飛ばすことや、幼児の要望で巻尺を出したりしたことは、年長児として園生活や遊びに慣れてくる時期においては、遊びの広がりや充実につながることを感じた。教師のモデルや素材の提示については、幼児の自主性を大切にするために、タイミングやバランスが大切だと考える。そのためにも、振り返りタイムで保育について情報共有し、次の保育につながるように話し合い、更新していくことが大切であると考えた。

(引用)

1) 上越教育大学附属幼稚園「子どもの育ちを支える～教育課程と年間指導計画～」2019, p53

< 5 歳クラス X 期 6・7 月 > 「遊びの広がりを支える援助」

これまでの保育の様子

5 月から 6 月にかけて、石の発掘遊びをきっかけに、数名の女児を中心に、石磨き、宝石屋さんへと遊びが広がり、これまでになかった遊びへと発展していた。一方で、これといった遊びが見付からなく、何となく遊具で遊んでいる幼児の姿も話題にしていた。3 歳、4 歳クラスのときは、年上の幼児がやっている遊びが刺激となり、真似をしながら遊びが広がっていくことがよくあるが、5 歳クラスになるとこのような遊びの出会いが少なくなる。5 歳クラス児にとって、新しいものの出会いが刺激となり、「面白そう」「やってみたい」という思いが生まれ、遊びが広がっていくのではないかとカンファレンスで話し合った。¹そして、進級して年長児としての生活にも慣れてきたこの時期だからこそ、新たなものの出会いや、出会ったときの援助を大切にしていこうと方向性を共有した。

早くも真夏のような気候になった 6 月下旬、ビニール袋に水をためたものを地面に投げて遊んでいる幼児がいた。水が地面に広がる様子を見て「爆弾だ」「爆発だ」と言って遊んでいた。そこに通りかかった 4 歳クラス副担任が「ずっと前のうみさんは、ペットボトルで爆発をしていたような…」とつぶやいた。²幼児は、「やってみよう」とペットボトルに水を入れて、地面に投げるものの、爆発のような現象は起こらなかった。その日の片付け中、水道ホースをペットボトルに差し込んで水をためていると、ペットボトルが膨らみ、プシュッとホースが外れる現象が起こった。「あれ、膨らんだ」「これが爆発？」とつぶやいた様子を振り返りタイムで担任と副担任とで情報共有した。ここ数年、ペットボトルを飛ばす遊びをしていることはなく、担任・副担任も経験したことがなかった。そこで、ペットボトルが爆発する遊びはどのようなものなのか、過去の資料を参考に、担任・副担任とで数種類のペットボトルで試してみた。³失敗して水がかかったり成功したりと教師も自ら体験してみることでペットボトルとホースの組み合わせによる遊びの可能性を感じた。この日の遊びや片付けでの出来事をきっかけに、新たな楽しみを見出して、遊びが広がっていくかもしれないと話し合い、翌日の環境構成としてペットボトルを 1 本、水道の近くに置いておくことにした。⁴

6 月 22 日

H 児：「先生、これは何？」

教師：「それは、昨日、I ちゃんたちが遊んでいたペットボトルだね。そういえば、片付けのときに水を入れたら、ペットボトルが膨らんで、プシュッってなったって言っていたよ」

H 児：「へえ、ぼくもやってみたいな。どうやっていたの？」

教師：「確か、ペットボトルの中にホースの先を入れていたみたいだったなあ」

H 児はコンテナの上にペットボトルを置いて、ホースの先を入れる。

H 児：「先生、ぼくが押さえているから、水を出して」

教師：「分かりましたよ」蛇口をひねる。

H 児：「あ！ちょっと動いた！」

教師：「本当だ！なるほど、おもしろいね！」

H 児：「もう 1 回やってみる。先生、また水を出してください」

何度か試したあと、ペットボトルを手を持って試す。するとペットボトルが水の勢いとともに足元の少し先に落ちる。

H 児：「わあ、ちょっと飛んだ！」2、3 回繰り返す。

教師：「すごいね！先生もやってみたいな」⁵

H 児：「いいよ。じゃあ、ぼくが水を出すね」

教師が、ペットボトルを上に向けて試すと、ペットボトルが約 2.5 m の園庭の柵を飛び超す。

H 児：「えー！あっちに行っちゃった！何で！」

教師：「何でだろう。びっくりした！」H 児と一緒に柵の外へ出て、ペットボトルを回収に向かう。

I 児：「何しているの」

コメントの追加 [h1]: 5 歳クラスという発達段階をふまえて援助の方向性を話し合っていることへの共感を得た。

本園では、遊びのきっかけとなるものの出会いを願って行う援助を「種まき」「種をまく」という言葉を使って表現している。園内の自然や生き物などがある程度知っている 5 歳クラスにとって、「種」となる遊びのきっかけは、自然や生き物などとの出会いに加えて、知的好奇心や科学的探究心を伴ったものへと幅が広がってきている。幼児が遊び出す「種まき」をどう行かうという視点も幼児の育ちを支えるために必要になると考える。

コメントの追加 [h2]: 事前に教師自身も遊びを試し、幼児の目線に立って体験し、環境構成や援助の方向性を確認していることへ多くの共感を得た。幼児教育においても教材研究が重要である。教材のもつ特徴や様々な用途、他の材と組み合わせたときの可能性など、多角的に考えておく。それが教師にとって援助のレパートリーを増やすことになり、目の前で展開する遊びや幼児の「やりたい」に対して、柔軟でより適切な援助につながると考える。

¹ 5 歳クラスの特徴を捉え、遊びの広がりを願う教師の姿(a) 担任・副担任で保育の方向性を確認することで同じ方向を向いて保育ができる(b)5 歳クラスならではの遊びの特性を考え、話し合っている(c) 子どもの経験、知識のないことへの新たな出会いの援助(f) 遊びの新たな広がり(h)

² 「つぶやき」にとどめた援助により、子どもの「やりたい」を大切にしている教師の姿が見える(c)

³ 事前に遊びを試してみることで、その後の援助の方向性を確認できる(a) 教師がまずは子どもの目線に立って遊びを試してみることで、子どもの楽しみを理解することにつながる(c) どんな遊びか、どんな材料が必要か教師自身がまず体験するという姿勢がよいと思う(d) 大人も経験のないことは試して楽しみを実感する(f) 時には「子ども」になってみる一教材の理解や支援の幅を広げることにつながる(h)

⁴ 遊びの広がりを願っての環境構成(b) 出し過ぎない(整え過ぎない) 援助(h)

⁵ 教師と一緒に遊びに参加することで他児も遊びに興味を示すきっかけとなる(b)

教師：「ペットボトルが森の方に飛んで行っちゃったから、取りに行くところなの」
I児：「へえ、ぼくもやりたい」
H児：「いいよ。そうだ、先生は、背が高いからあんなに飛んだんだよ」
H児はビールケースを取りに行き、その上に立って、ペットボトルにホースをセットする。
H児：「やったー、飛んだ！」
I児：「次はぼくだよ。水、出して」
興味をもった幼児が次々に仲間入りする。飛ばしたい人と水道から水を出したい人に分かれ、順番に試す。
I児：「あれえ、あんまり、飛ばないなあ」
H児：「あのね、ホースをペットボトルの中に入れたら、そのすぐ近くを持つといいんだよ」
I児たちは、遠くまで飛ばなくても、水がかかっても笑顔で片付けまで遊び続ける。

ペットボトルを水道の近くに置いておくと、興味をもったのは、前日にペットボトルの遊びをしていなかったH児であった。前日に遊んでいた幼児とつなぐ援助を考えたが、周りにいなかったため、H児の試したい思いに寄り添って、教師も側で一緒に遊びながら、H児が感じる面白さに共感していこうと考えた。⁶H児と教師の2人で遊ぶ時間がしばらく続いた。遊びが続いていくことで、その様子に興味をもった幼児が仲間入りして、かかわりながら遊びが広がっていくかもしれないと思い、一緒に遊び続けた。⁷ペットボトルにホースで水を入れて遊ぶことは、H児にとって、見たことも経験したこともない初めての遊びである。ペットボトルは少し動くか、水があふれた勢いでホースが外れるくらいであったが、遊びへの興味が継続するように、ペットボトルの動きにおもしろさを感じられるような言葉をかけた。⁸また、実際にペットボトルが遠くまで飛ぶことを知ることで、この遊びのおもしろさに気付くきっかけになるのではないかと考えた。⁹そこで、H児が何回も試した後のタイミングで、教師もペットボトルを飛ばす遊びに加わった。前日の降園後に担任と副担任とで、試していたこともあり、ペットボトルは思った以上に高く飛んだ。驚きながら柵の外へペットボトルを取りに行くH児と教師の姿を見て、興味をもったI児らが仲間入りすることにつながった。仲間が増えたタイミングで教師はH児と一緒に遊ぶ援助から見守りを中心とした援助に切り替え、幼児同士のかかわりで遊びが進んでいくようにした。¹⁰

振り返りタイムでは、遊びの様子を共有するとともに、H児と1対1で長くかかわったことや教師がペットボトルを飛ばしたことは幼児の自主性を大切にする援助として適切であったかという思いも話した。¹¹この日の片付けの時間までたくさんの幼児が夢中になってから遊ぶ姿につながったことと照らし合わせ、状況に応じて、教師が遊びに加わる援助をすることも、その後の遊びの広がりにつながっていくのではないかと話し合った。

6月23日

H児：「やったー！飛んだ！」
I児：「あれ、また落ちちゃった」
H児以外の幼児が試しても、ほぼ足下近くに落ちることに気付いた副担任が、近くを通りかかった担任にその様子を伝える。前日からの様子をふまえ、自分が使っているペットボトル以外のものも選べるようにしてみようと話し合う。担任はプラスチックかごにペットボトルを数本入れて、近くにそっと置く。¹²
J児：「これ使っていいのかなあ？」
教師：「いいですよ」
J児：「こっちにしよう」手にしていたペットボトルとかごの中のものを交換して試す。
J児：「わあ、飛んだ！」
教師：「すごい！あんなところまで飛んでいったよ」

コメントの追加 [h3]: 遊びの状況に応じて援助を変えていることに共感を得た。今回、初めは幼児の側と一緒に遊んでいたが、仲間が増えたら見守りの援助に切り替えていこうと考えていた。それは、友達同士でかかわって遊ぶ姿や協同する姿への願いが念頭にあるからである。「まさに OODA ループ」というコメントのように、その場の状況に応じて、柔軟に援助を更新していくことが幼児の育ちにつながっていくと考える。

コメントの追加 [h4]: 今回の援助についての妥当性にかかわるコメントが多かった。保育後、今日の援助は幼児にとって適切だったのか思いを巡らせるが、一人で妥当性を確認することは難しい。本園の評価観にあるように、「職員の語り合いによって共感・合意を得る」ことによって評価の妥当性を確認することができる。複数で保育を評価するからこそ、一人よがりな援助にならずに済む。そして方向性や妥当性が職員間で確認されている安心があるからこそ、自信をもって次の援助にあたるのだと考える。

⁶ 教師が遊びに加わることで安心して新しい遊びを始めることができる(a)共に遊ぶ。同じ心もちになる(h)

⁷ 遊びに没頭するような空気、かかわりを促すような空気をつくる教師(c) 広がりを期待し、願っている気持ち伝わる(g)

⁸ 教師と一緒に遊ぶことで遊びが継続、発展する(f) 声かけ＝盛り上げるという願いが伝わる(g)

⁹ 教師の姿が新しい遊びを続ける刺激になり、幼児の「やりたい」のきっかけになっている (a) ①「おもしろい」と感じる言葉かけ②教師と一緒に遊ぶ この2つが幼児の遊びへの興味が継続する要素となっている(b)

¹⁰ 子どもの姿を見取りながら遊びに入ったり抜けたりする援助がよい(d) 遊びの状況に応じ、援助を変えている (まさに OODA ループ) 援助から見守りへ状況に応じた適切な切り替え。自主性を大切に働きかけ (h)

¹¹ 保育の振り返りを複数で行うことで援助の妥当性について考えることができる(b) 幼児との1対1のかかわりを大切にしている(c) 教師と一緒に遊ぶことで他事とのかかわりにつながる(f) 広がりのための一つの援助だと思う(g) 自分自身も日々迷ったり反省したりする。この時の援助としては教師が飛ばすことも必要(適切)であったと感じる(h)

¹² 遊びが広がるような援助がよいと思う(d)

I 児：「えーどうして？」
J 児：「分からないけど、このペットボトルにしたら飛んだよ」
I 児：「ぼくも、違うのにしようかな」かごの中のものとの交換する。
I 児：「あれ、やっぱり飛ばない」再度、交換して試す。
I 児：「やったー！飛んだ！ねえ、どこまで飛んでいった？」
教師：「あの木の枝の上まで飛んでいったよ！すごいねI ちゃん！」
I 児：「うん！もう1回やろう！」

翌日、H児たちは園庭に出るとすぐにペットボトルを飛ばす遊びを始めた。**幼児同士で遊びを進めていたため、教師は遊びに加わることはしないで遊ぶ様子を見守っていた。**¹³ 前日は、新しい遊びへの興味やペットボトルがホースから外れる際に水がかかる心地よさがあり、飛んでも飛ばなくても、笑顔で遊び続ける姿を捉えていた。H児はペットボトルが飛ぶたびに喜び、どうやるとよく飛ぶのか友達に教えていた。H児以外の幼児は、何回試しても足下に落ちてしまい、物足りなさを感じ始めている様子を読み取っていた。その様子に気付いた副担任と担任とで情報を共有した。¹⁴ そこで、持ち方や水の出し方だけではなく、ペットボトルの口径でよく飛ぶものとそうではないものがあることを話し合った。幼児は、教師に要望して出してもらったペットボトルを自分の遊ぶ道具として大事に使っていた。そのため、幼児が試行錯誤する範囲に、ペットボトルを選択することは入っていないのだと捉えた。¹⁵ そこで、H児以外にも、ペットボトルが飛んだときのうれしさを味わい、もっとやりたいという思いにつながるように、自由に使えるペットボトルを用意することにした。¹⁶ 振り返りタイムでは、**ペットボトルを選択できる環境構成にした**¹⁷ ことで、多くの幼児がペットボトルが飛んだことに達成感を味わい、夢中になって遊びを続け、もっと高く飛ばそうと、持ち方を工夫していたことを共有した。また、I 児を中心に、ペットボトルがどこまで飛んだかという高さや長さへの関心が芽生えている¹⁸ ことから、**これからの幼児のやりたい思いに合わせて、どのような援助をしていくか考えていくことにした。**¹⁹

6 月 30 日

H 児：「うーん、クモの巣に届かない」枝をキウイ棚のクモの巣に上に向かって動かす。
教師：「どうしたら、届かなあ」
I 児：「そうだ！ロケットランチャーだ！」
H 児：「そうだよ！やろう、やろう！先生、ペットボトル貸してください」
教師：「棚の中のかごに入っていますよ」
I 児：「よし、これにしよう」よく飛ぶペットボトルを手取る
H 児：「先生、水を出してください」
教師：「いいですよ」
I 児：「上がった！もう1回やろう」ホースをペットボトルに差す。
H 児：「わあ！あっちに飛んで行っちゃった」
教師：「すごいね！あんなどころまで飛んでいったの！」
I 児：「すぐ飛んだ！何メートル飛んだのかなあ」
教師：「そうだねえ。どうやったら、分かるのだろうね²⁰」
I 児：「そうだなあ。あ、巻尺！巻尺って、幼稚園にある？」
教師：「巻尺かあ。先生たちの部屋にあったかもしれないなあ」
I 児：「行ってみよう」
H 児と I 児で職員室に行き、職員から巻尺を借りる。教師から教えてもらい、巻尺の赤い数字で飛んだ長さを確かめていると、次々に仲間が入ってくる。
K 児：「ぼくが、こっちを持つよ」

コメントの追加 [h5]: 幼児の姿や遊びの状況に応じて、援助を変えていることへの共感を得た。あえて遊びに加わることをしなかったのは、「幼児同士で言葉を交わし、かわりながら遊びを進めるように」という、教師が願う姿が現われていたからである。直接的な援助を「しない」ことで、このように主体的に遊ぶ姿を「守っている」とも言える。

コメントの追加 [h6]: 遊びの広がりや主体的に遊ぶ姿を願い、環境に働きかけた援助について多くの共感を得た。本園の屋外遊びで使用している道具は大別すると次の3つである。①クラスに関係なく自由に使えるもの（おわん、なべ、スコップ等）②各クラスの道具として自由に使えるもの（すり鉢、虫かご等）③幼児の要望を受けて、個々に渡したもの（ビニール袋、ペットボトル等）。今回のペットボトルは③であったため、幼児は「自分が使う道具」として大事にしていた。このような背景と遊びの状況を踏まえると、遊びの発展には自由に選べる環境が適していると考えた。これまでに③から②へ環境を更新するエピソードが共有されているが、どの程度出すのか、どのタイミングで出すのかは、その時の遊びの状況によって異なる。状況に応じて判断することや担任・副担任との情報共有、振り返りが欠かせない。

¹³ “やらない援助“幼児同士のかかわりを大切にしている(b) 子どもが自分でできる力を信じている。子どものことをよく読み取っているからこそ見守れる。これまでの援助の上に成り立つ見守り(c) 遊びの状況に応じ、援助を変えている(g)

¹⁴ 観察が支援につながっている(g)

¹⁵ 幼児の知識の範囲を考えている(c)

¹⁶ 遊びを持続させるためのさらなる刺激になっている(a)

¹⁷ 幼児が主体的に遊びを楽しむための環境に働きかける援助—環境構成—(b) 子どもの様子を見ながら配慮しているところがよい(d) 選択できる環境構成をすることで試行錯誤、継続につながる(f) 遊びが広がる援助(h)

¹⁸ PDCAのように、やってみて、観察して、評価、そしてまたプランの流れがある(g)

¹⁹ 目の前にいる幼児の思いから援助を考える大切さ(c)

²⁰ 子どもの問いに対して答えをあえて出さない(f) すぐに答えを出さない。考える機会を与える(h)

H児：「分かった。ぼくがペットボトルの方に行くね」
I児：「何メートルかなあ。えーと10メートルだ！」
J児：「今度は、ぼくが飛ばしたい」
H児：「いいよ。そうしたら、また測ろうよ」
J児：「I君、水出して」

I児とH児が、クモの巣を取るためにペットボトルを飛ばすことになった。一番よく飛ぶと思うペットボトルを選んで飛ばすと、遠くまで飛び、どのくらい飛んだのか知りたいという思いにつながった。先週から何度も試して、よく飛んだときの達成感を得て、新たな目的が共有されるという姿に遊びの広がりとして5歳クラス児の育ちを感じた。²¹飛んだ距離を知りたいというI児の思いを支えたいと考え、どうやったら分かるか問う言葉かけをした。先週の様子から、教師は、援助のレパトリーとして、目印を付けたり、線を引いたりする姿を想定して使える道具を用意していた。²²定規や巻尺も幼稚園にあるが、初めから使うことは考えていなかった。そのため、I児が「巻尺」と言ったとき、これまで遊びの中で使ったことのなかった道具を提供するかどうか迷った。²³しかし、I児がメートルという数の単位に興味をもっていただけと幼児がやりたい思いを抱いているときに、その思いをきっかけとして新しい道具と出会うことがよいのではと考え、巻尺を事務室に一緒に借りに行くことにした。やりたい思いに寄り添い、巻尺を出したことで、ペットボトルを飛ばして遊ぶ楽しさに加えて、どのくらい飛んだか確かめたり、もっと飛ぶように何度も試しながら記録を伸ばそうと挑戦したりする遊びへと広がった。²⁴また、水道の蛇口を操作する役や巻尺の両端を持つ役など、幼児同士で声をかけ合って、協力しながら主体的に遊びを進める姿につながったと捉えた。²⁵

考察

教師は、この時期の幼児が自ら興味をもって新しいものに出会い、やりたい思いが生まれ、遊びが広がることを願っている。遊びの広がりとともに、工夫したり、何度も試行錯誤したり、これまでの経験とつなげたりするなど様々な育ちにつながっていくと考える。そのため、新たなものに興味をもつきっかけとして新たな材を出すなどの環境構成を行っている。今回、過去の遊びの様子を知る職員から、ペットボトルで爆発ができることを幼児と聞いたとき、これも新たな興味へのきっかけになるのではないかと考えた。担任・副担任とで実際に試してみても、この機会を活かしていけるように援助をしていこうと方向性を確認した。しかし、新しいものの出会いがあれば、常に遊びが広がるとは限らない²⁶。幼児の様子を見守りながら、何に興味があり、どこに楽しみを見出しているのか、楽しみ方に変化の兆しがあるのかなどを読み取ることを大切にしてきた。そして、その状況に適した援助を考えて、遊びに加わったり、環境を更新したりすることで、遊びが継続しながら広がっていくのだと考える。²⁷

水曜カンファレンスでもこの遊びの経緯を話題に出した。実際に幼児が遊ぶ様子を見ていた他クラスの職員から、「幼児同士で教え合っていた」「3歳クラス児が『おもしろいことをしているよ』と言いに来て、遊びを見て楽しんでた」といった意見があった。²⁸5歳クラス児にとっては、試行錯誤しながら友達と協同的に遊びを進めていく姿につながった。また、周りで見えていた年下の幼児にとっても、新たな遊びに出会い、興味の広がりにつながったと捉えた。²⁹

年間指導計画のX期に『幼児の遊びへの新たな意欲をかき立てるため、教師が遊びのモデルになったり、竹やシロツメクサなど季節感のある素材を遊びに提示したりする』³⁰とある。今回、遊びの状況の中で、教師がペットボトルを飛ばすことや、幼児の要望で巻尺を出したりしたことは、年長児として園生活や遊びに

コメントの追加 [h7]: 遊びの流れや読み取りを背景に、幼児のやりたい思いに寄り添って援助したことについてのコメントが多かった。これまでに遊びの中で使っていない道具であったが、幼児の思いを肯定的に受け止めて、その思いに寄り添って援助を考えた。それが、幼児の主体性やその後の遊びの広がりにつながっていくと考える。

コメントの追加 [h8]: 幼児の姿を読み取り、幼児理解をもとにして援助を考えていることについての共感が得られた。幼児の楽しみを読み取ることは、幼児が遊び込む姿を支えることにつながる。様々な試行錯誤することを楽しんでいるのか、友達とのかかわりを求めているのかなど、幼児が体験していることを捉えて援助することが大切である。

²¹ 遊びの広がり＝年長児ならではの。個としてだけではなく仲間意識なども見て取れる年長児の姿(h)

²² 子どもの姿から思いを読み取り援助を想定する教師の姿(a)

²³ 援助の迷い (b)

²⁴ 計画していなかったことでも目の前の子どもの思いに合わせて臨機応変に援助する教師。その背景には読み取りや願いがある(c) 子どもの声に応じて道具を準備しているところがよかった(d) 幼児の「やりたい」に寄り添う(f) 幼児理解、見取り、遊びの流れなどから判断して、道具との出会いが生まれたと思う(g) 幼児のやりたい思いを大切にし、援助することで幼児の遊びが広がり継続している(a) 子どもの「やりたい」に寄り添った試行錯誤(f) ペットボトルや巻尺などの提示が、確実に育ちを促している様子が読み取れる(h)

²⁵ 迷った結果、提供した新しい道具から幼児同士のかかわりが生まれた。主体性につながった(b) 子どもの「やりたい」に寄り添った共同作業(f)

²⁶ 目新しいものがあれば何でもよいというわけではないと思う(d)

²⁷ 多面的に幼児の思いを読み取る教師の姿(a) 幼児理解・幼児の思いの読み取りの大切さ(b) 材ありきの遊びではなく、遊びを通して多様な育ちを願う教師の姿(c) 子どもの様子を読み取りながら、その場その場で援助を考えていくことは大切だと思う(d) 幼児理解とそれに適した援助(f) 見守り、観察、幼児理解がベースにある(g)

²⁸ 園の職員全体で幼児の遊びを見守っている(b)

²⁹ 遊びの伝承(a) 5歳クラス児にとっての新たな経験と新たな遊びの伝承(f)

³⁰ 子どもの発達を考えた遊びの支援、援助(f)

慣れてくる時期においては、遊びの広がりや充実につながることを感じた。教師のモデルや素材の提示については、幼児の自主性を大切にするために、タイミングやバランスが大切だと考える。³¹そのためにも、振り返りタイムで保育について情報共有し、次の保育につながるように話し合い、更新していくことが大切であると考えた。³²

(引用)

1) 上越教育大学附属幼稚園「子どもの育ちを支える～教育課程と年間指導計画～」2019, p53

コメントの追加 [h9]: 振り返りやカンファレンスの大切さについてのコメントがあった。教師のモデルや素材の提示など、瞬時に判断した援助がよりよい方向につながることもあれば、適切だったのかどうか悩むこともある。何でも語り合うことで、次はこうしていこうという方向性が確認でき、それが幼児の自主性を大切にする保育の更新につながると考える。

³¹ 幼児の表示やしぐさ、発言などから幼児の思いを読み取りながらタイミングを見極めることの大切さ(a) 教師主導の遊びにならないようタイミングやバランスは本当に大切だと考える(d)

³² 振り返りの重要性(b) 保育は常に更新し続ける営みであるという捉えに共感する(c) カンファレンスの大切さ(f)

< 5歳クラス XI期 9月 > 「幼児の『やりたい』を支える環境構成と援助」

これまでの保育の様子

2学期の始まりに際し、季節の変化による生き物や植物との出会いや仲間や年下とのかかわりにつながるような屋外遊びの充実を願って、テラス周辺の環境を担当、副担任とで整備した。また、本棚の整理も行い、季節の遊びや屋外遊びにつながりやすい図鑑や絵本を手にとりやすいところに置いたり、帰りの集まりで読み聞かせをしたりした。

X期から振り返りタイムで話題にしてきたことの中に、遊びの継続があった。幼児によって、一つの遊びをずっと続けて片付けの時間まで続けることもあれば、ある程度遊んだところで遊びを止める姿もあった。そこで、幼児が興味をもっていることを読み取って、道具や材料を準備したり、仲間と遊びのイメージが共有できるように援助したりしていこうと話合っていた。

9月上旬、帰りの集まりに秘密基地をつくる絵本を読んだところ、翌日にL児ら数名の幼児が築山のトンネルにシートをかぶせて秘密基地をつくって遊んでいた。築山は園庭の奥にあるため、他の幼児はこの遊びに気付いていない様子であった。そこで、担任・副担任とで相談し、遊びへの興味が広がるきっかけとなるかもしれないと考え、みんなの時間に幼児同士で遊びを紹介し合うことにした。

9月8日

M児：「テントつくりたい。先生、サッカーゴール使いたい」

教師：「いいねえ。今、誰も使っていないから大丈夫そうだね」

N児：「テントつくるの？Bちゃん、入れて」

M児：「いいよ。ゴール運ぶの手伝って」

L児：「分かった。シートもかぶせようよ」仲間入りしたO児P児と、

2つのサッカーゴールを向かい合わせて、シートをかぶせる。

L児：「あのね、ガムテープはくっつかなかったよ」シートを地面に貼ろうとするN児に言う。

N児：「どうやってとめたらいいかなあ」

M児：「あ、知ってる！先生、ハンマー貸してください。あと、くぎみたいなもの」

教師：「ハンマーね、いいですよ。くぎみたいなものってどういうもの？もう少し詳しく教えてください」

M児：「あのね、シートの穴にくぎみたいなのを打って、シートをとめるの」

教師：「あー、なるほどね。一緒に探してみようか」

教師は、副担任に声をかけ、テントづくりが展開していった経緯とM児たちがやりたいと思っていることに使えるような道具や材について相談する。

教師：「こんなのがあったけど、どう？」シート用のプラスチックペグを見せる。

M児：「そうそう、これ。これをハンマーで打つんだ」

M児は、シートの穴にプラスチックペグを通し、木づちで地面に打ち込んでいく。

O児：「テントの上に上がれないかな」シートの上に乗るが、シートごと落ちそうになる。

M児：「2階をつくろうよ」短い板をサッカーゴールの上に置いて乗ろうとするが、板とゴールがたわむ。

L児：「テントこわれちゃう」

M児：「もっと違う板ないかなあ」

教師：「ゴールも少し曲がっていたね。壊れなくてよかった」

N児：「そうだ！ビールケースを中に入れたらどう？」

P児：「やってみよう」ビールケースを3段に重ねたものを並べて、その上に乗る。

M児：「やったあ！上がった」

教師：「わあ！本当にテントの2階みたいになったね。すごい！」

O児：「おーい、やっほー」離れたところにいる友達に呼びかける。

片付けの時間になり、教師が片付けを知らせる言葉をかける。

M児：「テント、片付けたくない。残したい」

教師：「ビールケースが高いから、どうしたらいいかなあ」

O児：「このままだと、そら組さん（3歳クラス児）が乗って危ないよ」

教師：「ランチの後で、みんなより先に遊びに来るかもしれないね」

P児：「三角のコーンとテープで囲もうよ」

M児：「お知らせに行けばいいよ」

P児：「テープがあれば入らないよ」

M児：「でも、お知らせに行った方がいいよ」

教師：「Aちゃんはどう思う？」

L児：「半分、半分にしたら」

教師：「どっちもやったらいいってことかな？」

M児：「そうしようよ」

P児：「そうだね。ぼくもお知らせに行くよ」

前日に振り返りタイムで話し合っていたことは、築山での秘密基地づくりについての方向性が中心であった。この日、前日は違う遊びをしていたM児から「テントをつくりたい」という声が上がった。教師は、友達の遊びに仲間入りすることが多かったM児が自分から「やりたい」という意欲を抱いたことを嬉しく感じ、その思いを支えたいと考えた。M児がテントづくりを進める様子から、本当のテントづくりのようにつくり進めることに面白さを感じていると捉えた。これまでの発掘遊びでも、より本物らしさにこだわることで遊びが継続していた経験を思い返し、幼児がやってみたいという思いを肯定的に受け止め、それができるだけ実現するようにと考えた。そこで担任・副担任とで木づちやプラスチックペグなどテントづくりの道具になりそうなものを相談するとともに、安全のためにどちらかは側で見守ってほしいと話した。

シートを張り終えたところで、遊びに合流していた仲間からシートの上に上がりたいという次の遊びの目的が生まれ、試行錯誤していた。以前に読み聞かせを行った絵本の秘密基地は2階があったので、そのイメージがきっかけになったのかもしれない。過去の遊びを振り返っても、上に上られるテントやおうちをつくっていたことはなかった。教師はその可能性を様々に想定してみたが、実現は難しいように思えた。しかし、幼児たちはいろいろと試すことに夢中になっている。その姿を大事にしたいと考え、安全面の配慮をしながら、幼児自身の考えで遊びを展開していく姿を見守ることにした。N児がビールケースを重ねることを提案し、目的を達成し喜び合う姿から幼児のもつ力の素晴らしさを感じ、見守り続けてよかったと感じた。

片付けの時間に「片付けたくない」という言葉が出たとき、教師もM児のやりたい思いが継続するように寄り添いたいと考えた。一方で、ビールケースを高く積んだ状態にしておくことについても、教師が一方的に指示するのではなく、幼児同士がどうするか考えていけるようにした。幼児が考えたことを行った上で、職員集会においても、場の状況や安全面について職員間で周知した。

さらに、遊びの展開によって、他にもテントや秘密基地をつくりたいという思いを抱く幼児がいることを想定して、テントづくりに使えそうな道具の確認や補充を行い、環境を整えた。

9月12日

Q児：「ぼくも自分でつくってみたい」

教師：「Fちゃんもテントつくりたいんだね」

Q児：「何でつくったらいいかなあ。サッカーゴールは使っているし」

教師：「そうだねえ」5歳クラスのテラス周辺をQ児とともに見回しながら歩く。

Q児：「あ、これ使ってみたい」夏野菜の栽培で使っていたV字に開く支柱を取り出す。

教師：「テントの形みたいになるね」

Q児：「うん。これを2つ使って、その上に棒を置くんだ」

O児R児：「Fちゃん、入れて」

Q児：「いいよ」

O児：「この棒、ビールケースに差せばいいんじゃない」

教師：「なるほど、そうすれば棒が倒れなくていいね」

R児：「あっちのテントとくっつけたいね」

Q児：「うん。ぼくもそうしたかったんだ」

週明け、Q児も自分でテントをつくりたいという思いを抱いた。教師は、他に興味をもった友達とのかかわりがもてるようにと願って、教師も一緒に道具を探しながら、Q児の思いに寄り添ってほしいと考えた。そして、担任・副担任とで確認していた道具を念頭に置きながら、Q児が自分で使ってみたいと思う道具が見付かることを願って、一緒に園内を歩いた。そして友達が合流した時点で、教師は見守り中心へと援助を切り替え、幼児がテントをつくるための方法を考えたり、試したりする姿を称賛していった。

振り返りタイムでは、サッカーゴールのテントと今回つくったテントを合体させたいという幼児の思いを共有し、サッカーゴールのテントづくりの中心になっていたM児たちとQ児たちの思いを読み取りながら、イメージのずれがあったときは、必要に応じて仲介してほしいと話した。

9月13日

O児：「Fくん、テントつなげようよ」

Q児：「うん」

O児：「ねえ、Bくん、そっちのテントとくっつけていい？」

M児：「いいよ」

O児：「シートで屋根もつなげたらいいんじゃない」テントとテントの隙間にシートを張る。

Q児：「ぼくは、こっちのドアをつくるよ」

S児：「ねえ、バーベキューしようよ」

M児：「うん。ぼく、枝を集めてくる」N児と枝を集め、バーベキュー台に見立てたビールケースに置く。

教師：「すごい。キャンプ場みたいだね。さすが5歳クラスさん」

3歳クラス副担任：「ここ何だろうね」3歳クラスL児とテントにやってくる。

T児：「テントだよ。ここで靴を脱いで入っていいよ」

3歳クラス副担任：「へえ、入っていいんだって。aちゃん、入ってみる？」

S児：「バーベキューも食べてね」

M児：「いっば、ぬーけた」

教師：「あらBちゃん、どこかに行ってくるのかな？」

M児：「うん。鬼ごっこ」

N児：「ぼくも鬼ごっこする」

教師：「そう、いってらっしゃい。テントがあるから疲れたら休めるね」

O児T児たちはバーベキューごっこをしたりテントの中に3歳クラス児を案内したりする。

M児：「お茶飲みに来た」

教師：「おかえり」

テントを合体したいという新たな「やりたい」が生まれることで、2つのテントをつなげる屋根を張ったり渡り廊下をつくったりと新たな遊びの目的ができ、さらにテントのドアづくりやバーベキューの準備などその場にいる仲間同士で協力しながら遊びのサイクルが回っていることを感じていた。教師は、幼児同士の力で遊びを進めていく姿を称賛していった。

振り返りタイムでは、2つのテントがつながったことでのイメージのずれはなかったものの、M児がある程度遊んだところで違う遊びへと気持ちが動いたことについて話題になった。違う遊びをしたい思いがあることを受け止めた上で、テントが遊びの拠点になることで、M児が新たにやりたいことが見付かっていくことを願って、教師はあえて「行ってらっしゃい」「おかえり」などの言葉を使ったことを共有した。テントなどの構造物をつくることに楽しみを見出している幼児もいれば、バーベキューごっこでのやりとりを楽しむ幼児もいる。M児は、テントなどをつくっていくことに面白さを感じているのかもしれないと考え、やってみたいと思うことが見付かるように、キャンプの雑誌を幼児の視線に入りやすいところに置いたり、幼児同士の会話からやりたい思いを読み取ったりしていこうと話した。

9月27日

N児：「Bちゃん、昨日またテントつくったんだよ。こっち来て」

M児：「へえ、見たいな」仲間とテントを見に行く。

T児：「今日もバーベキューしようよ」

T児：「先生、食べて」

教師：「ありがとう。えーっと、たれはありますか？」

T児：「あっ、待っててください」テラスからドレッシングボトルを持ってくる。

教師：「いただきます。たれがかかって、おいしいなあ」

教師：「これは何かしら」バーベキュー台に置いてあった先の曲がった塩化ビニールパイプ（以下塩ビ管）を見る。

P児：「これで、手を洗えるんじゃない？」塩ビ管をビールケースに差し、くんできた水を流す。

教師：「おー！テントで手も洗えて、キャンプ場みたいだね」

O児：「この鍋にも水を入れてください」塩ビ管の下に鍋を置く。

M児：「ねえ、汚れた水を流すところもつくろうよ」

N児：「やろう」

M児：「雨どいもってくるね」テントから離れた場所に向かって雨どいを置き、水を流す。

O児：「ここに穴を掘ろうよ」水が流れる先をスコップで穴を開ける。

P児：「料理の水と手を洗う水を流すところがあたらいいんじゃない」

M児：「この横に並べようよ」雨どいを持ってきて、先に置いた横に並べる。

N児：「ぼく、水をもってくるね」

M児：「ありがとう。みんな流すよ！」

P児：「オッケー！」

9月15日、週末に台風が来るため、グラウンドにつくっていたテントを片付けることにした。サッカーゴールのテントは元に戻したが、Q児が中心につくったテントはつくって間もないため片付けることに躊躇していた。教師は、折り畳んで収納できることを伝え、遊びたいときに再度使えるようにしていた。

9月下旬、そのテントを再度グラウンドに設置し、幼児の日陰をつくりたいという思いからタープもつく

っていた。この日にいなかったM児を次の日に友達が誘い、翌日もバーベキュー遊びが始まっていた。担任はお客として遊びに加わりながら、いろいろな道具の使い道を考える少しのきっかけがあれば、M児の「やりたい」がつながっていくかもしれないと考え、近くに置いてあった塩ビ管はバーベキューの何かに使うのかつぶやいてみた。このようなつぶやきは幼児の興味に結びつくこともあれば結びつかないこともあることを前提に、意図的なつぶやきにならないようにさりげない口調でつぶやいた。今回は、P児が水道のように水が流せるか試し始めたことが、M児の新たな発想につながり、排水管をつくろうという新たな遊びの目的が生まれた。バーベキューごっこにおいてもM児にとって、水を流すところをつくるという楽しみが加わり、友達と声をかけ合いながら協同的に遊びを続けていくことにつながったと捉えた。

考察

1 か月近く続いたテントづくりやテントを中心としたごっこ遊び。まずはやってみたいと思えるものに出会うための環境構成を大切にした。また、X期までの遊びの様子から、幼児の中に「前と違うことをやってみたい」「もっとすごくしたい」「もっと本物らしくしたい」という遊びへの意欲を読み取っていた。テントづくりにおいて、木づちやプラスチックペグ、支柱などを安全面に配慮した上で使えるようにしたり、バーベキューにおいても金網や時期が過ぎた夏野菜など本物らしさを感じられるものを使うようにしたりした。また片付け方についても、残すものと片付けるものを相談し、幼児の思いを大切にしたりしてきたことが意欲の持続につながったと考える。

援助では、「テントの上に上がってみたい」という新たな目的が生まれたとき、挑戦してみたいという思いを肯定的に捉え、安全面の配慮をしながら、幼児が試行錯誤する体験を保障した。この「待つ・見守る」援助が、自ら考えて、試し工夫して目的を達成する姿につながったと考える。

また、一つの目的が達成されたあと、次の「やりたい」につながるように振り返りタイムで話し合いを重ねてきた。遊びを止めるときがあっても、遊びが継続していく中で、次の「やりたい」が見付かることを願ってきた。教師がお客役になったり言葉をかけたりしてきたが、そのときに適切と考えた援助であっても、その後の幼児の姿や育ちに照らして、見守りや仲介役に切り替えるなど援助を変えていった。幼児が発達していく姿を捉えながら、方向性を話し合い、援助を常に更新していくことが大切だと考える。

誕生日を迎えた幼児が遊ぶ内容を決めてクラス全員で遊ぶ「誕生日遊び」を毎月行っている。これまで鬼ごっこやかくれんぼをすることが多かったが、この秋「みんなでテントをつくりたい」という声上がり、再度サッカーゴールでテントを組み立てた。この思いに驚くとともに嬉しさを感じた。テントをつくって様々に遊んだことが、その幼児にとって心が動き、心に残る体験だったのだと捉えた。

< 5歳クラス XI期 9月 > 「幼児の『やりたい』を支える環境構成と援助」

これまでの保育の様子

2学期の始まりに際し、季節の変化による生き物や植物との出会い、仲間や年下とのかかわりにつながるような屋外遊びの充実を願って、テラス周辺の環境を担任、副担任とで整備した。また、本棚の整理も行い、季節の遊びや屋外遊につながりやすい図鑑や絵本を手にとりやすいところに置いたり、帰りの集まりで読み聞かせをしたりした。¹⁾

X期から振り返りタイムで話題にしてきたことの中に、遊びの継続があった。幼児によって、一つの遊びをずっと続けて片付けの時間まで続けることもあれば、ある程度遊んだところで遊びを止める姿もあった。そこで、幼児が興味をもっていることを読み取って、道具や材料を準備したり、仲間と遊びのイメージが共有できるように援助したりしていこうと話し合っていた。

9月上旬、帰りの集まりに秘密基地をつくる絵本を読んだところ、²⁾翌日にL児ら数名の幼児が築山のトンネルにシートをかぶせて秘密基地をつくって遊んでいた。築山は園庭の奥にあるため、他の幼児はこの遊びに気付いていない様子であった。そこで、担任・副担任とで相談し、遊びへの興味が広がるきっかけとなるかもしれないと考え、みんなの時間に幼児同士で遊びを紹介し合うことにした。³⁾

9月8日

M児：「テントつくりたい。先生、サッカーゴール使いたい」
教師：「いいねえ。今、誰も使っていないから大丈夫そうだね」
N児：「テントつくるの？Bちゃん、入れて」
M児：「いいよ。ゴール運ぶの手伝って」
L児：「分かった。シートもかぶせようよ」仲間入りしたO児P児と、2つのサッカーゴールを向かい合わせ、シートをかぶせる。
L児：「あのね、ガムテープはくっつかなかったよ」シートを地面に貼ろうとするN児に言う。
N児：「どうやってとめたらいいかなあ」
M児：「あ、知ってる！先生、ハンマー貸してください。あと、くぎみたいなの」
教師：「ハンマーね、いいですよ。くぎみたいなのってどういうもの？もう少し詳しく教えてください」⁴⁾
M児：「あのね、シートの穴にくぎみたいなのを打って、シートをとめる」
教師：「あー、なるほどね。一緒に探してみようか」
教師は、副担任に声をかけ、テントづくりが展開していった経緯とM児たちがやりたいと思っていることに使えるような道具や材について相談⁵⁾する。
教師：「こんなのがあったけど、どう？」シート用のプラスチックペグを見せる。
M児：「そうそう、これ。これをハンマーで打つんだ」
M児は、シートの穴にプラスチックペグを通し、木づちで地面に打ち込んでいく。
O児：「テントの上に上がれないかな」シートの上に乗るが、シートごと落ちそうになる。
M児：「2階をつくろうよ」短い板をサッカーゴールの上に置いて乗ろうとするが、板とゴールがたわむ。
L児：「テントこわれちゃう」
M児：「もっと違う板ないかなあ」
教師：「ゴールも少し曲がっていたね。壊れなくてよかった」
N児：「そうだ！ビールケースを中に入れたらどう？」
P児：「やってみよう」ビールケースを3段に重ねたものを並べて、その上に乗る。
M児：「やったあ！上がった」
教師：「わあ！本当にテントの2階みたいになったね。すごい！」
O児：「おーい、やっほー」離れたところにいる友達に呼びかける。
片付けの時間になり、教師が片付けを知らせる言葉をかける。
M児：「テント、片付けたくない。残したい」

コメントの追加 [h1]: 環境構成や本の読み聞かせが興味や遊びの広がりへのきっかけになることに共感を得た。季節の変化とともに園庭で見られる動植物も変化するため、図鑑や絵本を更新することを大切にしている。また援助の方向性に合わせて、本棚に置く本や読み聞かせに使用する本を選んでいる。これも援助のレパートリーの一つとして共通認識されていると考えた。

¹⁾ 環境構成を行うことで幼児の興味の広がりや深まりを援助することができる(b) 遊びのきっかけになる援助や環境構成を考えている(c) 本が大好きな5歳クラスにあった働きかけ(g)

²⁾ 帰りの集まりの読み聞かせが遊びのきっかけになっている(c)

³⁾ 遊びの共有とかかわり、遊びの継続の援助(f) 4歳クラスでもやり始めている。4歳クラスでも有効な様子(g)

⁴⁾ 発達段階を考えた道具の出し方(c)

⁵⁾ 保育中に情報を共有することで同じ様に援助をすることができる(b) 何があったらいいか、どこまで道具を出すかが同じクラス内の教師で共有できると子どもへの援助が統一できてよいと思った(d)

教師：「ビールケースが高いから、どうしたらいいかなあ」⁶
O児：「このままだと、3歳クラスの子が乗って危ないよ」
教師：「ランチの後で、みんなより先に遊びに来るかもしれないね」
P児：「三角のコーンとテープで囲もうよ」
M児：「お知らせに行けばいいよ」
P児：「テープがあれば入らないよ」
M児：「でも、お知らせに行った方がいいよ」
教師：「Aちゃんはどう思う？」
L児：「半分、半分にしたら」
教師：「どっちもやったらいいってことかな？」
M児：「そうしようよ」
P児：「そうだね。ぼくもお知らせに行くよ」

前日に振り返りタイムで話し合っていたことは、築山での秘密基地づくりについての方向性が中心であった。この日、前日は違う遊びをしていたM児から「テントをつくりたい」という声が上がった。教師は、友達の遊びに仲間入りすることが多かったM児が自分から「やりたい」という意欲を抱いたことを嬉しく感じ、その思いを支えたいと考えた。M児がテントづくりを進める様子から、本当のテントづくりのようにつくり進めることに面白さを感じていると捉えた。これまでの発掘遊びでも、より本物らしさにこだわることで遊びが継続していた経験を思い返し、幼児がやってみたいという思いを肯定的に受け止め、それができるだけ実現するようにと考えた。⁸そこで担任・副担任とで木づちやプラスチックペグなどテントづくりの道具になりそうなものを相談するとともに、安全のためにどちらかは側で見守っていこうと話した。⁹

シートを張り終えたところで、遊びに合流していた仲間からシートの上に上がりたいという次の遊びの目的が生まれ、試行錯誤していた。以前に読み聞かせを行った絵本の秘密基地は2階があったので、そのイメージがきっかけになったのかもしれない。¹⁰過去の遊びを振り返っても、上に上られるテントやおうちをつくっていたことはなかった。教師はその可能性を様々に想定してみたが、実現は難しいように思えた。しかし、幼児たちはいろいろと試すことに夢中になっている。その姿を大事にしたいと考え、安全面の配慮をしながら、幼児自身の考えで遊びを展開していく姿を見守ることにした。¹¹N児がビールケースを重ねることを提案し、目的を達成し喜び合う姿から幼児のもつ力の素晴らしさを感じ、見守り続けてよかったと感じた。¹²

片付けの時間に「片付けたくない」という言葉が出たとき、¹³教師もM児のやりたい思いが継続するように寄り添いたいと考えた。一方で、ビールケースを高く積んだ状態にしておくことについても、教師が一方的に指示するのではなく、幼児同士がどうするか考えていけるようにした。¹⁴幼児が考えたことを行った上

コメントの追加 [h2]: 長期的視点をもって、幼児の日々の変化を捉えていることに対して共感を得た。友達の遊びに興味をもって一緒に遊んでいるのか、幼児自身が「これをやりたい」と思って遊んでいるのかを見極めて、幼児の主体性が発揮されるように支えたいという願いが肯定的に受け止められたものと考える。

コメントの追加 [h3]: 幼児のこれまでの遊びや経験を思い返し、本物らしさを求めていると捉えて、援助を考えている点に多くの共感を得た。3歳クラスのときから様々な遊びを見たり体験したりしてきた5歳クラス児にとって、これまでより難しそうなことやより本物らしいことを試したいという思いがあるのではないかということを感じていた。その思いを支え、幼児の満足感や充実感につながるよう援助することと安全面の配慮を大切にした。

で、職員終会においても、場の状況や安全面について職員間で周知した。¹⁵

さらに、遊びの展開によって、他にもテントや秘密基地をつくりたいという思いを抱く幼児がいることを想定して、テントづくりに使えるような道具の確認や補充を行い、環境を整えた。¹⁶

コメントの追加 [h4]: 園全体で幼児の思いと安全面を支えていることについてのコメントが多かった。5歳クラスの遊びが年下の幼児にとって危ないことがある。また、午後の自由遊びの時間帯がクラスによって幅があることから、新しい遊びが始まり、その環境を園庭や遊戯室に残している場合は、園全体での情報共有が欠かせない。危険性があるから、すぐに撤去するということではなく、全職員で安全面に配慮しながら支える態勢が、子どものやりたい思いも支えていると考える。

⁶ 安全についても自分で考えられるような言葉かけ(c)「危ない」「やめて」ではなく、心配なところを伝えるだけで子どもに判断するきっかけをつくっていると考える(d)

⁷ 一人一人の幼児の日々の変化をしっかりとし見極めている(b) 長期的にみているからこそ分かる幼児の育ち(c)「よし、ここだ!」というタイミングだと受け止め、できるだけ実現するようにしたいという思い(h)

⁸ 幼児のこれまでの経験から援助を考える (a) 今までの遊びから子どもたちが好むものを分析することで今の遊びの援助方法を考えているところに共感した(d) 本物に近いことがより子どもの興味、「やりたい」につながる(f) 子どもたちとともに本物らしさを追求しようとする教師の姿に共感できる(g)

⁹ 危険が伴う遊びであれば、なおさら担任同士の連携が必須だと考える(d) 職員間で共有して全力でさせるというスタンス(h)

¹⁰ 間接的に遊びの援助を行っている(b)

¹¹ 幼児の思いを大切に、幼児を信じる教師(a) 幼児のもつ自分でできる力を信じる教師(c)

¹² 子どもを信じる教師の姿勢に共感。信じることで子どもも願う方向へ進んでいくのだと感じる(g)

¹³ 遊びに夢中になった M 児の思いがこの言葉に集約されている(c)

¹⁴ 危険予測がまだ難しい幼児に気付けるように声をかけている。教師が一方的に教えるのは簡単だが、時間がかかっても幼児と考える援助に共感した(d) 幼児同士で考えていく大切さ(f)

¹⁵ 職員が担任の願いや幼児の思いを知り、共有することができた(a) 園全体で情報共有することで幼児の思いも安全面も大切にすることができ(b) 園全体で遊びや安全を支える(g)

¹⁶ 子どもの状況に合わせて環境整備をしている(d) その時々にあった環境整備(g)

9月12日

Q児：「ぼくも自分でつくってみたい」
教師：「Fちゃんもテントづくりたいんだね」
Q児：「何でつくったらいいかなあ。サッカーゴールは使っているし」
教師：「そうだねえ」5歳クラスのテラス周辺をQ児とともに見回しながら歩く。
Q児：「あ、これ使ってみたい」夏野菜の栽培で使っていたV字に開く支柱を取り出す。
教師：「テントの形みたいになるね」
Q児：「うん。これを2つ使って、その上に棒を置くん」
O児R児：「Fちゃん、入れて」
Q児：「いいよ」
O児：「この棒、ビールケースに差せばいいんじゃない」
教師：「なるほど、そうすれば棒が倒れなくていいね」
R児：「あっちのテントとくっつけたいね」
Q児：「うん。ぼくもそうしかかったんだ」

週明け、Q児も自分でテントをつくりたいという思いを抱いた。教師は、他に興味をもった友達とのかかわりがもてるようにと願って、教師も一緒に道具を探しながら、Q児の思いに寄り添っていこうと考えた。そして、担任・副担任とで確認していた道具を念頭に置きながら、Q児が自分で使ってみたいと思う道具が見付かることを願って、一緒に園内を歩いた。¹⁷そして友達が合流した時点で、教師は見守り中心へと援助を切り替え、¹⁸幼児がテントをつくるための方法を考えたり、試したりする姿を称賛していった。

振り返りタイムでは、サッカーゴールのテントと今回つくったテントを合体させたいという幼児の思いを共有し、サッカーゴールのテントづくりの中心になっていたM児たちとQ児たちの思いを読み取りながら、イメージのずれがあったときは、必要に応じて仲介していこうと話し合った。¹⁹

9月13日

O児：「Fくん、テントつなげようよ」
Q児：「うん」
O児：「ねえ、Bくん、そっちのテントとくっつけていい？」
M児：「いいよ」
O児：「シートで屋根もつなげたらいいんじゃない」テントとテントの隙間にシートを張る。
Q児：「ぼくは、こっちのドアをつくるよ」
S児：「ねえ、バーベキューしようよ」
M児：「うん。ぼく、枝を集めてくる」N児と枝を集め、バーベキュー台に見立てたビールケースに置く。
教師：「すごい。キャンプ場みたいだね。さすが5歳クラスさん」
3歳クラス副担任：「ここ何だろうね」3歳クラスL児とテントにやってくる。
T児：「テントだよ。ここで靴を脱いで入っていいよ」
3歳クラス副担任：「へえ、入っていいんだって。aちゃん、入ってみる？」
S児：「バーベキューも食べてね」
M児：「いっぽ、ぬーけた」
教師：「あらBちゃん、どこかに行ってくるのかな？」
M児：「うん。鬼ごっこ」
N児：「ぼくも鬼ごっこする」
教師：「そう、いつてらっしゃい。テントがあるから疲れたら休めるね」²⁰
O児T児たちはバーベキューごっこをしたりテントの中に3歳クラス児を案内したりする。
M児：「お茶飲みに来た」
教師：「おかえり」

テントを合体したいという新たな「やりたい」が生まれることで、2つのテントをつなげる屋根を張った

コメントの追加 [h5]: 幼児の思いとその場の状況から援助を切り替える判断をしていることに共感を得た。その場に興味をもった友達がいなかったことから、教師が遊びに加わることで、幼児のやりたい思いが立ち消えることなく、続いていくことを願った。友達が仲間入りした時点で、対教師ではなく対仲間とのかかわりを大切にしたいと考え、見守り中心の援助に切り替えた。これは、今年度の研究で見えてきた援助の在り方とつながっている。

¹⁷ 子どもの遊びは常に変化していく中で、それに対応していくためには、どんな道具があるのか出すのか出さないのかをあらかじめ考えておく、その道具のメリット・デメリットを分かっておくことで危険性の回避にもつながると考える(d)

¹⁸ 教師は「少しだけ」きっかけをつくって見守ることが「やりたい」を支えると考え(c) 支援の切り替え(g) 友達とのかかわりがもてるようにという願いとそのための援助の切り替え。願い、準備がしっかりある(h)

¹⁹ 幼児中心に遊びを支えようとする教師の姿(a) かかわりの中で遊びをつくっていかうとする教師の構え(c)

²⁰ M児がつくったテントを拠点とし遊ぶような言葉かけ(b) わずかなきっかけで変わってしまう幼児の思いに寄り添いながらも遊びの継続を支える教師の言葉かけ(c)

り渡り廊下をつくったりと新たな遊びの目的ができ、さらにテントのドアづくりやバーベキューの準備などその場にいる仲間同士で協力しながら遊びのサイクルが回っていることを感じていた。教師は、幼児同士の力で遊びを進めていく姿を称賛していった。²¹

振り返りタイムでは、2つのテントがつながったことでのイメージのずれはなかったものの、M児がある程度遊んだところで違う遊びへと気持ちが動いたことについて話題になった。違う遊びをしたい思いがあることを受け止めた上で、テントが遊びの拠点になることで、M児が新たにやりたいことが見付かっていくことを願って、教師はあえて「行ってらっしゃい」「おかえり」などの言葉を使ったことを共有した。²²テントなどの構造物をつくることに楽しみを見出している幼児もいれば、バーベキューごっこでのやりとりを楽しむ幼児もいる。²³M児は、テントなどをつくっていくことに面白さを感じているのかもしれないと考え、²⁴やってみたいと思うことが見付かるように、キャンプの雑誌を幼児の視線に入りやすいところに置いたり、幼児同士の会話からやりたい思いを読み取ったりしていこうと話した。²⁵

9月27日

N児：「Bちゃん、昨日またテントつくったんだよ。こっち来て」
M児：「へえ、見たいな」仲間とテントを見に行く。
T児：「今日もバーベキューしようよ」
T児：「先生、食べて」
教師：「ありがとう。えーっと、たれはありますか？」²⁶
T児：「あっ、待ってください」テラスからドレッシングボトルを持ってくる。
教師：「いただきます。たれがかかって、おいしいなあ。これは何かしら」バーベキュー台に置いてあった先の曲がった塩化ビニールパイプ（以下塩ビ管）を見る。
P児：「これで、手を洗えるんじゃない？」塩ビ管をビールケースに差し、くんできた水を流す。
教師：「おー！テントで手も洗えて、キャンプ場みたいだね」
O児：「この鍋にも水を入れてください」塩ビ管の下に鍋を置く。
M児：「ねえ、汚れた水を流すところもつくろうよ」
N児：「やろう」
M児：「雨どいもってくるね」テントから離れた場所に向かって雨どいを置き、水を流す。
O児：「ここに穴を掘ろうよ」水が流れる先をスコップで穴を開ける。
P児：「料理の水と手を洗う水を流すところがあったらいいんじゃない」
M児：「この横に並べようよ」雨どいを持ってきて、先に置いた横に並べる。
N児：「ぼく、水をもってくるね」
M児：「ありがとう。みんな流すよ！」
P児：「オッケー！」

9月15日、週末に台風が来るため、グラウンドにつくっていたテントを片付けることにした。サッカーゴールのテントは元に戻したが、Q児が中心につくったテントはつくって間もないため片付けることに躊躇していた。教師は、折り畳んで収納できることを伝え、遊びたいときに再度使えるように²⁷していた。

9月下旬、そのテントを再度グラウンドに設置し、幼児の日陰をつくりたいという思いからタープもつくっていた。この日にいなかったM児を次の日に友達が誘い、翌日もバーベキュー遊びが始まっていた。担任はお客として遊びに加わりながら、いろいろな道具の使い道を考える少しのきっかけがあれば、M児の「やりたい」がつながっていくかもしれないと考え、近くに置いてあった塩ビ管はバーベキューの何かしに使うのかつぶやいてみた。このようなつぶやきは幼児の興味に結びつくこともあれば結びつかないこともあることを前提に、意図的なつぶやきにならないようにさりげない口調でつぶやいた。²⁸今回は、P児が水道のよう

コメントの追加 [h6]: 少しのきっかけとしての援助を行うが、あくまでも遊びの中心は幼児であること、幼児から「やってみよう」という思いが出るようにすることが大切であるといったコメントがあった。言葉による「種をまく」援助ともいえるが、教師の言葉の発し方によっては、誘導的な言葉かけになってしまうことが危惧される。そのため、お客役として遊びに加わりながら、遊びの流れに沿ってつぶやくことを意識した。

²¹ 幼児の力を信じている(a) 自分たちでやり遂げたという自信につながる(g)

²² 幼児の思いを受け止め大切にしている(a)

²³ 一人一人の「楽しみ」が違うことを前提に援助を考えている(c)

²⁴ 幼児の「やりたい」気持ちを大切にしている(b)

²⁵ どうしたら子どもの遊びが広がっていくかを考えた援助だと思った(d)

²⁶ 幼児の遊びにあったらもっと楽しくなりそうなものを考え、お客として伝えている(d)

²⁷ 楽しく遊んでいたものでも中断せざる得ないこともあるので収納場所などの確保も必要だと感じた(d)

²⁸ 願いをもちながらも幼児が自分で考えて試せるようにしている(a) 遊びの中心は幼児。教師はきっかけを投げてみるのみ。決定権は幼児にある。幼児の“やってみたい”が大事(b) ものを何かに見立て、発想することで遊びが広がるかもしれないという願いがあるが、幼児の発想として出てくるよう、さりげなくつぶやく教師。まさに黒子のような(c) 大きな全体の中で、その時々での瞬時の判断・援助ができる。つぶやきの意図が分かった(h)

に水が流せるか試し始めたことが、M児の新たな発想につながり、排水管をつくろうという新たな遊びの目的が生まれた。パーベキューごっこにおいてもM児にとって、水を流すところをつくるという楽しみが加わり、友達と声をかけ合いながら協同的に遊びを続けていくことにつながったと捉えた。

考察

1か月近く続いたテントづくりやテントを中心としたごっこ遊び。まずはやってみたいと思えるものに出会うための環境構成を大切にした。²⁹また、X期までの遊びの様子から、幼児の中に「前と違うことをやってみたい」「もっとすぐくしたい」「もっと本物らしくしたい」という遊びへの意欲を読み取っていた。テントづくりにおいて、木づちやプラスチックペグ、支柱などを安全面に配慮した上で使えるようにしたり、パーベキューにおいても金網や時期が過ぎた夏野菜など本物らしさを感じられるものを使うようにしたりした。また片付け方についても、残すものと片付けるものを相談し、幼児の思いを大切にしたりしてきたことが意欲の持続につながった³⁰と考える。

援助では、「テントの上に上がってみたい」という新たな目的が生まれたとき、挑戦してみたいという思いを肯定的に捉え、安全面の配慮をしながら、幼児が試行錯誤する体験を保障した。³¹この「待つ・見守る」援助が、自ら考えて、試し工夫して目的を達成する姿につながったと考える。

また、一つの目的が達成されたあと、次の「やりたい」につながるように振り返りタイムで話し合いを重ねてきた。遊びを止めるときがあっても、遊びが継続していく中で、次の「やりたい」が見付かることを願ってきた。³²教師がお客役になったり言葉をかけたりしてきたが、そのときに適切と考えた援助であっても、その後の幼児の姿や育ちに照らして、見守りや仲介役に切り替えるなど援助を変えていった。幼児が発達していく姿を捉えながら、方向性を話し合い、援助を常に更新していくことが大切だと考える。³³

誕生日を迎えた幼児が遊ぶ内容を決めてクラス全員で遊ぶ「誕生日遊び」を毎月行っている。これまで鬼ごっこやかくれんぼをすることが多かったが、この秋「みんなでテントをつくりたい」という声が上がリ、再度サッカーゴールでテントを組み立てた。³⁴この思いに驚くとともに嬉しさを感じた。テントをつくって様々に遊んだことが、その幼児にとって心が動き、心に残る体験だったのだと捉えた。

コメントの追加 [h7]: 幼児の育ちに合わせて、よりよい援助を考え続けていくことに多くの共感を得た。遊びが継続していくことで、新しい問題が見付かったり、解決へ向けて試行錯誤したりする経験につながる。そのため、幼児の思いと遊びの充実という両面から援助を考えてきた。担任一人ではなく、振り返りタイムで副担任と話し合うことができるしくみがあることによって、よりよい援助へ向けて常に更新にしていけることにつながっていると考え。

²⁹ やりたいを支える環境構成(f)

³⁰ 幼児のやりたいにつながる環境構成や言葉かけ(a)

³¹ 年長児になると、より楽しみたいと願う遊びに危険が伴う時があると感じた。安全確保に努めるために教師が道具のメリット・デメリット、使ったことによる事故など念入りに下調べしておく必要があることをこの事例を通して感じた(d)

³² 息の長い遊びの中で育ちを支えようとしている(c)

³³ よりよい援助を考え続ける姿(a) 職員同士の話し合いでその時に必要な援助を考えることで幼児の育ちを支えている(b) 幼児の育ちに合わせた援助の大切さ(f) これからのことや行った援助を振り返り、更新していくことが大切(h)

³⁴ 今度は「みんなで」したいという思いへテントづくりの遊びがあそびの時間を超えて発展している(c) 大勢の友達と遊んだ経験が「みんなで遊ぶと楽しい」という気持ちにつながる(g)

< 5歳クラス Ⅻ期 2・3月 > 「共に遊びをつくる姿を支える」

これまでの保育の様子

保育室や遊戯室で遊ぶことが多くなるⅫ期、室内遊びが充実するように、ロッカーの配置やコマや毛糸など保育室に置くものを相談しながら整えた。幼児は一輪車や大縄跳び、製作遊びなどに夢中になり、お楽しみ発表会で披露する幼児もいた。お楽しみ発表会を終えた2月下旬、振り返りタイムでは、気の合う仲間と少人数で遊ぶ姿について話題になっていた。Ⅻ期は「共通の目標に向かって活動し、共に生活する楽しさを味わう時期」である。幼児のしたいことが周囲の幼児にも伝わり、共に考えたり協力したりして遊びをつくっていく楽しさにつながるように援助していこうと話合っていた。

2月下旬、製作遊びをすることの多いU児が積木を遊戯室に並べていた。片付けの時間になると、U児は海賊船をつくっている途中のため残しておきたいという願いを担任に伝えにきた。新たなやりたいことへ心が動いている姿と捉え、U児と相談し、預かり保育の支障にならないようにカラーマットで積木をカバーしておくことにした。夕方の職員室で、翌朝の預かり保育でカラーマットを使用することについて相談を受けた。担任は、海賊船を囲っていたカラーマットをブルーシートに交換しておくことを伝えた。

3月1日 前半

V児：「このブルーシート使っていいのかな」

副担任：「担任の先生に聞いてみますか」

担任が登園の受入をしている合間に副担任が相談にくる。担任自身、遊びが広がるきっかけになるかもしれないと思っていたことを伝え、遊びに使うことを確認する。

V児：「先生、ブルーシート使っていいですか」

担任：「いいですよ」

V児：「分かった」急いで遊戯室に戻る。

担任：「わあ、すごい！本当の海みたいだ。Bちゃんは泳いでいるの？」受入を終えた担任が遊戯室に行く。

U児：「うん。ここは海のトンネルだよ。息を止めて、もぐろの」

3歳クラス副担任：「へえ、ここは海なんだね」

3歳クラスV児：「もぐりたい」

U児：「魚をふまなければいいよ」一緒にブルーシートのトンネルの中に入る。

担任：「あ、魚もいるんだね。素敵だなあ」

W児：「私はつりをしてるの」

担任：「昨日は、出会いの広場だったけど、今日は海賊船でつりができていいねえ」

V児：「ねえ、下りて！」海賊船の上にいる3歳クラス児を見かけて言う。

担任：「どこならいいのかしら」

V児：「どこもだめ。そら組（3歳クラス）はだめ」

3歳クラス児は違う場所で遊び始める。

登園の仕度を終えるとすぐにV児は大きなブルーシートが遊びに使えないか聞きに来た。このブルーシートは、自由遊びの環境構成として用意したものではなかったが、やってみたい思いを大切にしたいと考えた。海賊船とブルーシートの海という2つの遊び場がつながったことでイメージが膨らみ、海水浴や釣りなど複合的な遊びを幼児がつくっていくことへと発展していった。

遊びの時間の前半、V児U児W児は、保育室で遊びに必要なものをつくり、海賊船に戻ることを繰り返していた。3歳クラス児が海賊船に上がっていることに気付いたV児が、同じ場で遊ぶことに難色を示した際、教師は、遊びが始まったばかりで自分たちがやりたいイメージの遊びをまずは存分に試したいのだろうと捉えた。そこで仲介を長引かせずに、V児が他の幼児を受け入れられるタイミングを待とうと考えた。その後に、遊戯室に来た3歳クラス担任に経緯を伝え、今は遊びを始めて間もないため、存分に楽しんだあとのタイミングなら、受け入れて遊べると思うということを伝えた。

3月1日 後半

U児：「ねえ、積木、動かさないで」海賊船の小部屋をつくりながら言う。

W児：「私だって、自分で海賊船の部屋をつくらみたい」

U児：「だったら、違うところでやってよ」

W児：「でも、もう積木がないんだよ」

担任：「どうしたらいいんだろうね・・・」

V児：「はい、これ」海賊船の後ろで使っていた積木をW児に渡す。

担任：「え、Aちゃんの部屋の積木、使っていいってこと」

V児：「うん、これもいいよ」積木を5～6個、W児に渡す。
W児：「Aちゃん、ありがとう」
X児：「私も入りたい」
Y児：「入れて。このクッキー食べていいよ」折り紙でつくっておいたクッキーを見せる。
U児：「いいよ。ありがとう」
V児：「ねえねえ、ここに魚が生まれたらいいよね」
U児：「魚のたまごをつくるね」折り紙を小さく切り、ブルーシートのトンネルに入れる。
V児：「魚の赤ちゃんもつくって、海賊船で育てようよ」
U児：「いいね、私、魚のケースつくる」保育室に戻り、空き箱の底に水色のペンで色を塗る。
W児：「私は、ペンギンの赤ちゃんをつくる」
Z児：「入れて」保育室でつくった潜水艦を持ってY児がやって来る。
V児：「えー、だめ。女子だけだよ」
Z児：「えー」
担任：「とても楽しそうなものね。先生も入れてほしいくらいだよ」
V児：「それに、南極は凍っているから潜水艦はもぐれないよ」
Z児：「うーん」
担任：「そうか、どんな船だったらいいのかなあ」

担任は副担任にV児とY児の経緯を伝える。同じクラスの幼児であれば受け入れられると思うが、これ以上言葉をかけ続けるより援助者が変わった方が折り合いがつけられるのではないかと話す。副担任が遊戯室の様子を見に行ったあとで、担任が遊戯室に行くとY児がブルーシートの海で潜水艦を動かしている。

Z児：「先生、見て」
担任：「おー、潜水艦が海の中を進んでいるねえ。Aちゃん、入れてあげたんだ」
V児：「あっちのトンネルは、魚のたまごがあるからだめだけど、こっちなら卵がないからいいの」
担任：「そうか、そうだったんだね。Eちゃん、とてもうれしそう」

後半の遊びの様子を見守る中で、仲間と遊びを発展させていく姿もあれば、思いがすれ違うときもあった。教師は援助をする際の判断として、Ⅻ期の5歳クラスは、これまで様々な経験をしてきたことから、幼児同士で遊びをつくり、進めていく力があると信じ、見守る援助を基本に、幼児の自信につながるような言葉をかけるようにした。他方、遊びのイメージややりたい思いにずれがあったとき、これまでは、遊びを止めてしまうことがあった。教師は、この遊びが続いていくことによって、共に遊びをつくり上げる楽しさを味わう経験になってほしいと願い、イメージや思いにずれがある場面において、幼児の思いを受け止めたり、仲間と考えたりしていけるように仲介しようと考えていた。

U児とW児が積木の取り合いをしていた場面では、V児は解決方法として自分が使っていた積木をU児に分けていた。V児と一緒に遊び仲間のために自分にできることを考えている姿を嬉しく思った。その後、X児Y児が仲間入りすることを受け入れて、和やかに遊びが進んでいった。その後、Z児が潜水艦を持って仲間入りすることに難色を示す場面があったものの、少ししてから、V児自身がZ児を受け入れて同じ場で遊んでいた。援助者を交代することが気持ちの変化につながったのだろうと思い、副担任にどのような言葉をかけたのか尋ねてみた。すると、タイミングが合わずに、声をかけていないことが分かった。教師がかかわりをつなぐ援助を重ねる必要はなく、自分で考えて、友達を受け入れた姿に育ちを感じた。振り返りタイムでは、明日も遊びが続くことを想定し、幼児同士がかかわりながら遊びを進める姿を見守っていこうと話合った。

3月2日

U児：「ねえ、これどうする？」海賊船に使っている積木を組み替えている。
W児：「あっちに、運ばない？」
U児：「トンネルにしようよ」
W児：「いいねえ。じゃあ、これも乗せようよ」一番長い積木を重ねる。
U児：「やった、トンネルになった」
W児：「上から海がよく見えるよ」トンネルの上に上がり、手作り望遠鏡で周りを見回す。
W児：「あ、危ない」トンネルの上に上がるための積木が倒れる。
教師：「大丈夫だった？ここどうしたらいいのだろうね」
U児：「ガムテープで貼ればいいよ」
W児：「ありがとう」一緒にガムテープで積木を留める。
W児：「ここからダイブできるんじゃない」積木の上からジャンプして、ブルーシートの上に着地する。
U児：「私も」

教師：「大ジャンプだね。ところで前にジャンプ遊びしていた友達は、マットを敷いていたけど」

U児：「え、やだよ。だって、シートが揺れないとつまらない」

W児：「でも、マットあった方が思いきりジャンプできるよ」

教師：「遊戯室にはいろいろなマットがあるねえ」

U児：「うーん。そうだ。あのマットの青いところが海で、赤いところが珊瑚にすればいい」

折り畳めるジャバラ状のマットの青い面と赤い面が見えるように敷く。

W児：「楽しい」マットに着地し、ブルーシートのトンネルの中にもぐっていく。

W児：「cちゃんもやりたいの？そら組（3歳クラス）さんは危ないからよく見ていてね」海賊船を眺めていた3歳クラス児に声をかけて、ジャンプを見せる。

W児：「cちゃん、次やっていいよ」

教師：「やさしいねえ。そら組（3歳クラス）さんもうれしそうだわ」

AA児：「入れて」友達と3歳クラスX児の3人でやって来る。

U児：「いいよ。でもその部屋は私の部屋だから入らないで」

AA児：「分かった」

U児：「やっぱり全部使っていいよ」

V児：「入れて」

3歳クラス児も一緒にV児U児W児たちは、トンネルの上からのジャンプを続ける。

登園前、保育室に海賊船の帽子的作り方の図を用意しておいた。これまで、ゲームキャラクターの帽子づくりから遊びが広がったことがあったため、遊びが停滞したときは、幼児の見えるところに作り方を置く環境構成をしていこうと担任と副担任とで共通理解していた。

この日、帽子づくりをすることはなく、U児とW児は、海賊船にトンネル状の見晴台をつくるという新たな目的をもって協力しながら遊びを進めていた。積木を立体的に積み、遊び方がよりダイナミックになってきた。教師は、昨日に続き、幼児同士で遊びを進めている際は、見守りに徹し、安全に遊ぶために幼児が気付いていない視点があったときは考えるきっかけの言葉をかけるようにした。積木が崩れそうなところをガムテープで貼ることをU児が提案し、協力して積木を固定している姿は、これまで他の幼児が2階建ての積木の家をつくった際に見たり仲間入りしたりした経験を活かしたりしている姿と捉えた。この日の遊びの時間、U児W児が遊びの中心となりながら、多くの5歳クラス児が遊びにかかわっていた。ジャンプを着地する場所にマットを置くことを躊躇していた場面でも、友達の意見を聞き入れて、自分のイメージに合うマットを使うことになった。自分のイメージと安全に遊ぶために必要なことを考え、自分の中で折り合いを付けている姿と捉えた。この後で同じクラスの友達2人と3歳クラス児が仲間入りした際に「やっぱり全部使っていいよ」という言葉からも仲間を受入れて、共に遊びを楽しもうとする気持ちを読み取った。また、昨日は3歳クラス児が遊びの場に入ることに難色を示していたV児が、今日は、年下の幼児とも一緒に遊んでいる姿を共有し、自分たちでかわりを広げていく姿を信じて見守っていこうと話し合った。

3月3日

U児が海賊の帽子をつくったものをかぶり、出会いの広場で3歳クラス児の周りを歩いて回っている。

3歳クラス担任：「それ、なあに」

W児：「海賊船の帽子だよ」

3歳クラス担任：「へえ、かっこいいね」

W児：「いいでしょ。あっちの海で泳げるんだよ」

3歳クラスY児「行ってみたい」

3歳クラス担任：「行ってみようか」

W児：「いいよ。こっちに来て」海賊船まで一緒に歩く。

W児：「こっちからのぼってもいいよ」

3歳クラス児3人が次々にマットにジャンプし、ブルーシートにもぐって泳ぐ真似をする。

U児：「ねえ、どうしてそら組がいるの？」

W児：「私が『いいよ』って言ったの」

U児：「そうなんだ。分かった」一緒にジャンプして遊ぶ。

3歳クラス児がジャンプしたあとで、U児がずれたマットをW児が元の位置に戻す。

教師：「Bちゃん、さすが！よく気付いたね」保育室出入り口から声をかける。

U児W児は朝から海賊船の部屋に行くが、「眠いなあ」とつぶやいて座っていた。週末の疲れも重なり、遊びが停滞している様子を感じ、昨日、用意していた帽子的作り方の図と海賊の絵本を幼児の視線に入りやすいテーブルに置いていた。しばらくして、帽子づくりに興味をもったU児とW児は、友達に手伝ってもらいながら、帽子を完成させた。担任が遊戯室に行くと、U児と3歳クラス児の異年齢で遊んでいた。異年齢のかかわりを嬉しく思い、そのきっかけを保育後に3歳クラス担任と情報共有した。帽子をかぶったU児が

3歳クラス児の方を見ながら歩いている姿から声をかけてほしいのではないかと読み取り、3歳クラス担任がU児に声をかけたことがきっかけであった。帽子が完成した達成感とそれを認めてもらえたことが、異年齢で共に遊びを楽しむことにつながった。担当クラス以外の幼児であっても、遊びへの思いを感じ取って、幼児に言葉をかける援助がW児の遊びへの思いを支えたと言える。帽子を完成させて遊戯室に戻ったU児も、W児の思いを受け入れて一緒に遊んでいた。U児は、着地用に敷いていたマットがずれたことに自ら気付き、仲間のためにマットを直していた。共に遊びを楽しみたいという思いで、それぞれが気付いたことを行いながら遊び続ける姿と捉えた。同じ時期に、海賊船遊びの他、ダンスショーや基地ごっこなど集団での遊びが行われていた。どの遊びにおいても、幼児同士で話し合い、遊びをつくり進める力を信じ、見守っていこうと確認した。

考察

海賊船遊びにおいて、場をつくる様子や遊びを進めている様子を見守っていると、これまでの幼稚園生活で幼児が見たり体験したりした遊びの要素が様々に含まれていることに気付いた。以前、U児たちは、テラスで机やシートをかぶせてトンネルをつくって遊んでいた。これがブルーシートを海に見立てたトンネルにつながっていると捉えた。他にも釣りごっこや海賊ごっこなどの様々なごっこ遊びをしてきたことが、遊びのイメージを共有しながら、遊びたい内容を話し合って、遊びをつくり上げることにつながっていると考えた。X児は、帰りの集まりのインタビューで「海賊船から出かけて、透明の敵と戦って、また戻ってくることが楽しかった」「みんなと仲良く遊んだことが一番楽しかった」と発表していた。このことから、共に遊びをつくる楽しさを味わっている様子がうかがえる。

幼児にとって魅力的な遊びがあると、興味をもった仲間が集まって来る。遊ぶ人数が多くなると、自分の思いと相手の思いにずれが生じてくる。教師は、幼児が自分で考えるきっかけとして、言葉をかけたり、タイミングがくるまで待ったりする援助を行ってきた。教師が、今すぐ、その場での解決を願う気持ちは抑えて、これまでの幼児理解に基づき、焦らず信じて待っていることが、幼児自身で解決していく姿につながることを感じる。気の合う少人数の仲間と遊ぶことも楽しいが、園生活だからこそできる集団での遊びを援助と環境構成の両面から支え、かかわりを経験から学んでいくことが大切だと考える。これまでの水曜カンファレンスの中で、トラブルはかかわりを学ぶ大切な機会であると援助の方向性を共有してきた。長期的な育ちを信じて幼児同士のかかわりを援助してきたことが、自分の思いを伝え、相手の思いを知ったうえで、共に過ごすために自己を調整したり、互いが納得するように考えたりしながら遊びをつくる姿につながったと考える。

<5歳クラス XII期 2・3月> 「共に遊びをつくる姿を支える」

これまでの保育の様子

保育室や遊戯室で遊ぶことが多くなるXII期、室内遊びが充実するように、ロッカーの配置やコマや毛糸など保育室に置くものを相談しながら整えた。幼児は一輪車や大縄跳び、製作遊びなどに夢中になり、お楽しみ発表会で披露する幼児もいた。お楽しみ発表会を終えた2月下旬、振り返りタイムでは、気の合う仲間と少人数で遊ぶ姿について話題になっていた。XII期は「共通の目標に向かって活動し、共に生活する楽しさを味わう時期」である。幼児のしたいことが周囲の幼児にも伝わり、共に考えたり協力したりして遊びをつくっていく楽しさにつながるように¹援助していこうと話し合っていた。

2月下旬、製作遊びをすることの多いU児が積木を遊戯室に並べていた。片付けの時間になると、U児は海賊船をつくっている途中のため残しておきたいという願いを担任に伝えにきた。新たなやりたいことへ心が動いている姿と捉え、U児と相談し、預かり保育の支障にならないようにカラーマットで積木をカバーしておくことにした。²夕方の職員室で、翌朝の預かり保育でカラーマットを使用することについて相談を受けた。担任は、海賊船を囲っていたカラーマットをブルーシートに交換しておくことを伝えた。

3月1日 前半

V児：「このブルーシート使っていいのかな」

副担任：「担任の先生に聞いてみますか」

担任が登園の受入をしている合間に副担任が相談にくる。担任自身、遊びが広がるきっかけになるかもしれないと思っていたことを伝え、遊びに使うことを確認する。

V児：「先生、ブルーシート使っていいですか」

担任：「いいですよ」

V児：「分かった」急いで遊戯室に戻る。

担任：「わあ、すごい！本当の海みたいだ。Bちゃんは泳いでいるの？」

受入を終えた担任が遊戯室に行く。

U児：「うん。ここは海のトンネルだよ。息を止めて、もぐるの」

3歳クラス副担任：「へえ、ここは海なんだね」

3歳クラスV児：「もぐりたい」

U児：「魚をふまなければいいよ」一緒にブルーシートのトンネルの中に入る。

担任：「あ、魚もいるんだね。素敵だなあ」

W児：「私はつりをしてるの」

担任：「昨日は、出会いの広場だったけど、今日は海賊船でつりができていいねえ」

V児：「ねえ、下りて！」海賊船の上にいる3歳クラス児を見かけて言う。

担任：「どこならいいのかしら」

V児：「どこもだめ。そら組（3歳クラス）はだめ」

3歳クラス児は違う場所で遊び始める。

登園の仕度を終えるとすぐにV児は大きなブルーシートが遊びに使えないか聞きに来た。³このブルーシートは、自由遊びの環境構成として用意したものではなかったが、やってみたい思いを大切にしたいと考えた。⁴海賊船とブルーシートの海という2つの遊び場につながったことでイメージが膨らみ、海水浴や釣りなど複合的な遊びを幼児がつくっていくことへと発展していった。⁵

遊びの時間の前半、V児U児W児は、保育室で遊びに必要なものをつくり、海賊船に戻ることを繰り返していた。⁶3歳クラス児が海賊船に上がっていることに気付いたV児が、同じ場で遊ぶことに難色を示した際、教師は、遊びが始まったばかりで自分たちがやりたいイメージの遊びをまずは存分に試したいのだろうと捉えた。そこで仲介を長引かせずに、V児が他の幼児を受け入れられるタイミングを待とうと考えた。その後に、遊戯室にきた3歳クラス担任に経緯を伝え、今は遊びを始めて間もないため、存分に楽しんだあとのタイミングなら、受け入れて遊べると思うということを伝えた。

コメントの追加 [h1]: 幼児の思いをくみ取って待つことと、その判断を情報共有することへ多くの共感を得た。異年齢でかかわることのよさを認識しているため、初めは、かわりをつなぐ援助を考えていた。しかし、幼児の姿から「海賊船遊びを楽しみたい」という新しい遊びに向かう意欲を感じたため、幼児がやりたいことを存分に試すことで、かわりながら遊ぶことへと気持ちが向いていくようになるのでは考えた。これまでの幼児理解に基づく判断のため、他クラスの教師にもその考えが伝わるように情報共有することが連携のとれた保育には欠かせないとする。

¹ 一人のやりたい遊びが周囲に広がることで、その子の自信にもなると思う(d)

² 遊びの継続を願った援助。子どもたちの「やりたい」が保障される(c) 子どもの気持ち「やりたい」を受け止め、次につなげる援助(f)

³ 使ってよいか聞きに来た＝出ているものが何でも遊びに使えるような保育環境が整っているということ(c)

⁴ 幼児の「やってみたい」を大切にしている(b) たまたま出していたものが子どもの発想を刺激することもあるので子どものやってみたいに応じられたことに共感した(d) 遊びの種まき、環境構成の大切さ(f)

⁵ ブルーシートを使えるようにしたことと遊びが発展していったと考える。幼児のやりたいを支えている(a)

⁶ 職員間の情報共有(b) V児の背景を知っているからこそその判断(c) 小さい子を入れてあげない＝いじわると大人の価値観で考えず、その子の思いをくみ取って応えている姿がいいと思う。またそれを周囲の職員にも伝える姿がよかった(d) 子どもの思いを受け止め、子どものタ

3月1日 後半

U児：「ねえ、積木、動かさないで」海賊船の小部屋をつくりながら言う。
W児：「私だって、自分で海賊船の部屋をつくってみたい」
U児：「だったら、違うところでやってよ」
W児：「でも、もう積木がないんだよ」
担任：「どうしたらいいんだろうね・・・」
V児：「はい、これ」海賊船の後ろで使っていた積木をW児に渡す。
担任：「え、Aちゃんの部屋の積木、使っていいってこと」
V児：「うん、これもいいよ」積木を5～6個、W児に渡す。
W児：「Aちゃん、ありがとう」
X児：「私も入りたい」
Y児：「入れて。このクッキー食べていいよ」折り紙でつくっておいしたクッキーを見せる。
U児：「いいよ。ありがとう」
V児：「ねえねえ、ここに魚が生まれたらいいよね」
U児：「魚のたまごをつくるね」折り紙を小さく切り、ブルーシートのトンネルに入れる。
V児：「魚の赤ちゃんもつくって、海賊船で育てようよ」
U児：「いいね、私、魚のケースつくる」保育室に戻り、空き箱の底に水色のペンで色を塗る。
W児：「私は、ペンギンの赤ちゃんをつくる」
Z児：「入れて」保育室でつくった潜水艦を持ってY児がやって来る。
V児：「えー、だめ。女子だけだよ」
Z児：「えー」
担任：「とても楽しそうだね。先生も入れてほしいくらいだよ」
V児：「それに、南極は凍っているから潜水艦はもぐれないよ」
Z児：「うーん」
担任：「そうか、どんな船だったらいいのかなあ」
担任は副担任にV児とY児の経緯を伝える。同じクラスの幼児であれば受け入れられると思うが、これ以上言葉をかけ続けるより援助者が変わった方が折り合いがつけられるのではないかと話す。副担任が遊戯室の様子を見に行ったあとで、担任が遊戯室に行くとY児がブルーシートの海で潜水艦を動かしている。
Z児：「先生、見て」
担任：「おー、潜水艦が海の中を進んでいるねえ。Aちゃん、入れてあげたんだ」
V児：「あっちのトンネルは、魚のたまごがあるからだめだけど、こっちなら卵がないからいいの」
担任：「そうか、そうだったんだね。Eちゃん、とてもうれしそう」

後半の遊びの様子を見守る中で、仲間と遊びを發展させていく姿もあれば、思いがすれ違うときもあった。教師は援助をする際の判断として、Ⅻ期の5歳クラスは、これまで様々な経験をしてきたことから、幼児同士で遊びをつくり、進めていく力があると信じ、見守る援助を基本に、幼児の自信につながるような言葉をかけるようにした。⁷他方、遊びのイメージややりたい思いにずれがあったとき、これまでは、遊びを止めてしまうことがあった。教師は、この遊びが続いていくことによって、共に遊びをつくり上げる楽しさを味わう経験になってほしいと願い、イメージや思いにずれがある場面において、幼児の思いを受け止めたり、仲間と考えたりしていけるように仲介しようと考えていた。

U児とW児が積木の取り合いをしていた場面では、V児は解決方法として自分が使っていた積木をU児に分けていた。V児と一緒に遊び仲間のために自分にできることを考えている姿を嬉しく思った。その後、X児Y児が仲間入りすることを受け入れて、和やかに遊びが進んでいった。その後、Z児が潜水艦を持って仲間入りすることに難色を示す場面があったものの、少ししてから、V児自身がZ児を受け入れて同じ場で遊んでいた。援助者を交代することが気持ちの変化につながったのだろうと思い、副担任にどのような言葉をかけたのか尋ねてみた。すると、タイミングが合わずに、声をかけていないことが分かった。教師がかかわりをつなぐ援助を重ねる必要はなく、自分で考えて、友達を受け入れた姿に育ちを感じた。⁸振り返りタイムで

コメントの追加 [h2]: 幼児が自ら育つ存在として信じる大切さやこれまでに経験したことをもとに信頼関係の中で見守っていることについてコメントがあった。幼児がイメージをもって積木を並べると、遊戯室がお店にも海賊船にもダンスステージにもなることに感動する。自分たちで遊びを創造し、つくり上げることを経験し、その楽しさや満足感を味わえるようにしたいと考えた。このようなとき、教師は遊びの流れや幼児同士のやりとりを妨げないように、見守りに徹することが大切だと考える。

コメントの追加 [h3]: 幼児同士のかかわりを信じる姿勢に共感を得た。様々な援助を考えて心づもりをしていても、タイミングよく援助を行えないときがある。それも含めて、振り返りタイムで情報を共有していくことが幼児理解や保育の更新につながることを感じた。コメントの1つに「想定していなかったことでも肯定的に受け止め、意味付けしていくところに評価のしくみのよさを感じる」とあった。どんなことでも話題に出せて、前向きに捉えられるところがカンファレンスのよさであると改めて感じた。

イミングを信じて待つ大切さ(f) 教師の見取りと待つ姿勢に共感(g)

⁷ 保育はチーム戦だと思った(d)

⁸ これまでの経験に基づいた援助の方向性(a) 幼児が自ら育つ存在であると信じることの大切さを改めて感じる(c) 1年間の遊びの姿からくる教師と子どもとの信頼関係が伝わってきた(d)

⁹ これまでの経験の積み重ねがあってこそその幼児の育ちの姿(a) 情報共有することで今後の保育に生かすことができる(b) すれ違うこともある。想定していなかったことでも肯定的に受け止め、意味付けしていくところに評価のしくみのよさを感じる(c) 子ども同士のかかわりを信じて待つ(f) 子どもたちを信じる姿勢に共感(g)

は、明日も遊びが続くことを想定し、幼児同士がかかわりながら遊びを進める姿を見守っていこうと話した。

3月2日

U児：「ねえ、これどうする？」海賊船に使っている積木を組み替えている。
W児：「あっちに、運ばない？」
U児：「トンネルにしようよ」
W児：「いいねえ。じゃあ、これも乗せようよ」一番長い積木を重ねる。
U児：「やった、トンネルになった」
W児：「上から海がよく見えるよ」トンネルの上に上がり、手作り望遠鏡で周りを見回す。
W児：「あ、危ない」トンネルの上に上がるための積木が倒れる。
教師：「大丈夫だった？ここどうしたらいいのだろうね」
U児：「ガムテープで貼ればいいよ」
W児：「ありがとう」一緒にガムテープで積木を留める。
W児：「ここからダイブできるんじゃない」積木の上からジャンプして、ブルーシートの上に着地する。
U児：「私も」
教師：「大ジャンプだね。ところで前にジャンプ遊びしていた友達は、マットを敷いていたけど」
U児：「え、やだよ。だって、シートが揺れないとつまらない」
W児：「でも、マットあった方が思いきりジャンプできるよ」
教師：「遊戯室にはいろいろなマットがあるねえ」
U児：「うーん。そうだ。あのマットの青いところが海で、赤いところが珊瑚にすればいい」
折り畳めるジャバラ状のマットの青い面と赤い面が見えるように敷く。
W児：「楽しい」マットに着地し、ブルーシートのトンネルの中にもぐっていく。
W児：「cちゃんもやりたいの？そら組（3歳クラス）さんは危ないからよく見ていてね」海賊船を眺めていた3歳クラス児に声をかけて、ジャンプを見せる。
W児：「cちゃん、次やっていいよ」
教師：「やさしいねえ。そら組（3歳クラス）さんもうれしそうだね」
AA児：「入れて」友達と3歳クラスX児の3人でやって来る。
U児：「いいよ。でもその部屋は私の部屋だから入らないで」
AA児：「分かった」
U児：「やっぱり全部使っているよ」
V児：「入れて」

3歳クラス児も一緒にV児U児W児たちは、トンネルの上からのジャンプを続ける。

登園前、保育室に海賊船の帽子的作り方の図を用意しておいた。¹⁰これまで、ゲームキャラクターの帽子づくりから遊びが広がったことがあったため、遊びが停滞したときは、幼児の見えるところに作り方を置く環境構成をしていこうと担任と副担任とで共通理解していた。¹¹

この日、帽子づくりをすることはなく、U児とW児は、海賊船にトンネル状の見晴台をつくるという新たな目的をもって協力しながら遊びを進めていた。積木を立体的に積み、遊び方がよりダイナミックになってきた。教師は、昨日に続き、幼児同士で遊びを進めている際は、見守りに徹し、安全に遊ぶために幼児が気付いていない視点があったときは考えるきっかけの言葉をかけるようにした。¹²積木が崩れそうなところをガムテープで貼ることをU児が提案し、協力して積木を固定している姿は、これまで他の幼児が2階建ての積木の家をつくった際に見たり仲間入りしたりした経験を活かしたりしている姿と捉えた。¹³この日の遊びの時間、U児W児が遊びの中心となりながら、多くの5歳クラス児が遊びにかかわっていた。ジャンプを着地する場所にマットを置くことを躊躇していた場面でも、友達の意見を聞き入れて、自分のイメージに合うマットを使うことになった。自分のイメージと安全に遊ぶために必要なことを考え、自分の中で折り合いを付けている姿と捉えた。この後で同じクラスの友達2人と3歳クラス児が仲間入りした際に「やっぱり全部使っているよ」という言葉からも仲間を受入れて、共に遊びを楽しもうとする気持ちを読み取った。また、昨日は3歳クラス児が遊びの場に入ることに難色を示していたV児が、今日は、年下の幼児とも一緒に遊ん

コメントの追加 [h4]: 「種をまく」援助として次の環境構成を考えていることに共感を得た。前日は片付けの時間まで遊びに没頭していた。翌日も続きの遊びをするだろうと想定していたが、ある程度満足したところで遊びが中断するかもしれないと考え、遊びの継続につながるように環境構成を更新した。すぐに用意できないものは、事前に準備しておくことで、幼児の遊びの流れを見ながらタイミングよく出すことができる。

¹⁰ 遊びのヒント・種となる環境構成(b)

¹¹ 幼児の遊びを支える環境構成(a) 遊びの種まき(f) さりげなく、しかし配慮に満ちた環境構成(g)

¹² 「少しだけきっかけをつくって見守る」黒子としての教師の姿(c) 「危ないからだめ」ではなく大人の危険意識を「どうしたらいい？」と子どもが自分で考えられるようになるための援助ではと思った(d)

¹³ イメージの共有と経験の積み重ね(f) これまでの遊びや経験が生かされている。全てがⅡ期につながっている(g)

でいる姿を共有し、自分たちでかわりを広げていく姿を信じて見守っていこうと話合った。¹⁴

3月3日

U児が海賊の帽子をつくったものをかぶり、出会いの広場で3歳クラス児の周りを歩いて回っている。
3歳クラス担任：「それ、なあに」
W児：「海賊船の帽子だよ」
3歳クラス担任：「へえ、かっこいいね」
W児：「いいでしょ。あつちの海で泳げるんだよ」
3歳クラスY児「行ってみたい」
3歳クラス担任：「行ってみようか」
W児：「いいよ。こっちに来て」海賊船まで一緒に歩く。
W児：「こっちからのぼってもいいよ」
3歳クラス児3人が次々にマットにジャンプし、ブルーシートにもぐって泳ぐ真似をする。
U児：「ねえ、どうしてそら組がいるの？」
W児：「私が『いいよ』って言ったの」
U児：「そうなんだ。分かった」一緒にジャンプして遊ぶ。
3歳クラス児がジャンプしたあとで、U児がずれたマットをW児が元の位置に戻す。
教師：「Bちゃん、さすが！よく気付いたね」保育室出入り口から声をかける。

U児W児は朝から海賊船の部屋に行くが、「眠いなあ」とつぶやいて座っていた。週末の疲れも重なり、遊びが停滞している様子を感じ、昨日、用意していた帽子の作り方の図と海賊の絵本を幼児の視線に入りやすいテーブルに置いていた。¹⁵しばらくして、帽子づくりに興味をもったU児とW児は、友達に手伝ってもらいながら、帽子を完成させた。担任が遊戯室に行くと、U児と3歳クラス児の異年齢で遊んでいた。異年齢のかかわりを嬉しく思い、そのきっかけを保育後に3歳クラス担任と情報共有した。帽子をかぶったU児が3歳クラス児の方を見ながら歩いている姿から声をかけてほしいのではないかと読み取り、3歳クラス担任がU児に声をかけたことがきっかけであった。帽子が完成した達成感とそれを認めてもらえたことが、異年齢で共に遊びを楽しむことにつながった。担当クラス以外の幼児であっても、遊びへの思いを感じ取って、幼児に言葉をかける援助がW児の遊びへの思いを支えたと見える。¹⁶帽子を完成させて遊戯室に戻ったU児も、W児の思いを受け入れて一緒に遊んでいた。U児は、着地用に敷いていたマットがずれたことに自ら気づき、仲間のためにマットを直していた。共に遊びを楽しみたいという思いで、それぞれが気付いたことを行いながら遊び続ける姿と捉えた。同じ時期に、海賊船遊びの他、ダンスショーや基地ごっこなど集団での遊びが行われていた。¹⁷どの遊びにおいても、幼児同士で話し合い、遊びをつくり進める力を信じ、見守っていこうと確認した。¹⁷

考察

海賊船遊びにおいて、場をつくる様子や遊びを進めている様子を見守っていると、これまでの幼稚園生活で幼児が見たり体験したりした遊びの要素が様々な含まれていることに気付いた。¹⁸以前、U児たちは、テラスで机やシートをかぶせてトンネルをつくって遊んでいた。これがブルーシートを海に見立てたトンネルにつながっていると捉えた。他にも釣りごっこや海賊ごっこなどの様々なごっこ遊びをしてきたことが、遊びのイメージを共有しながら、遊びたい内容を話し合っ、遊びをつくり上げることにつながっていると考えた。X児は、帰りの集まりのインタビューで「海賊船から出かけて、透明の敵と戦って、また戻ってくることが楽しかった」「みんなと仲良く遊んだことが一番楽しかった」と発表していた。このことから、共に遊びをつくる楽しさを味わっている様子がうかがえる。

幼児にとって魅力的な遊びがあると、興味をもった仲間が集まって来る。遊ぶ人数が多くなると、自分の思いと相手の思いにずれが生じてくる。教師は、幼児が自分で考えるきっかけとして、言葉をかけたり¹⁹、

コメントの追加 [h5]: 園全体で連携してチームで子どもを支えていることに多くの共感を得た。クラスに関係なく、目の前にいる幼児の思いに寄り添い、教師が同じ方向性でかわかることは、全ての幼児にとって安心感や自己肯定感につながると考える。このような連携をこれからも大切にしていきたい。

コメントの追加 [h6]: 幼児の経験が積み重なり、育ちにつながることに多くの共感を得た。幼児が遊んでいる姿の中に、どのような学びや育ちがあるのかを捉えることは大切である。そのときには分からないことでも、複数で振り返ったり、長期的な視点でこれまでの経験と関係付けて考えたりすることで改めて気付くことがある。保育記録やカンファレンス等の評価のしくみは、保育の改善はもとより、幼児の育ちを捉えていくことにも有用だと感じた。

¹⁴ 子どもを信頼して待つ援助(f) 5歳クラス児の育ちであり、教師の信じる姿勢が子どもたちに伝わっているとも感じる(g)

¹⁵ 幼児理解がされた上での環境への働きかけで遊びに発展が見られた(b) 環境構成が大事(d)

¹⁶ 全ての職員が全ての幼児の援助に加わることでできる環境。方向性がそろっている(a) 園全体で同じ方向を向いて保育をしている(b) 子どもの育ちを共有する時は、保育をしている楽しさを感じる時であると感じる(c) 自クラスだけでなく、他クラスの教師が入ることで、より子どもの自信がついたのではないかと考える。やっぱり保育はチーム戦(d) 園全体で子どもを支えている(f) 教師同士の連携。みんなで子どもたちの学びや成長を支えている園(g)

¹⁷ 幼児同士のかかわりと育ちを信じて待つ、見守る援助(f) 和やかに、ドーンジャンケンが続いていた2人、大勢で鬼ごっこをしていた姿、並んで木登りする姿、全てにおいて3年間の学びと育ちを感じ取ることができた(g)

¹⁸ 経験全てが育ちにつながる。それを見取り、意味付けすることが教師の大切な役割(c) 子どもたちの遊び一つ一つは全く違うもののように見えるけれど、その遊びの中には今までの遊びの要素がしっかり組み込まれていると感じた。遊びを点でなく線で、また長期的にみることは大切だと思った(d) 経験が積み重なって育ちにつながっていく(f) 生き生きと楽しそうに遊んでいた姿が印象的(g)

¹⁹ きっかけづくりの言葉かけ。幼児主体の保育であることを大切にしている援助(b)

タイミングがくるまで待ったりする援助²⁰を行ってきた。教師が、今すぐ、その場での解決を願う気持ちは抑えて、これまでの幼児理解に基づき、焦らず信じて待っていることが、幼児自身で解決していく姿につながることを感じる。²¹気の合う少人数の仲間と遊ぶことも楽しいが、園生活だからこそできる集団での遊びを援助と環境構成の両面から支え、かかわりを経験から学んでいくことが大切だと考える。²²これまでの水曜カンファレンスの中で、トラブルはかかわりを学ぶ大切な機会であると援助の方向性を共有してきた²³。長期的な育ちを信じて幼児同士のかかわりを援助してきたことが、自分の思いを伝え、相手の思いを知ったうえで、共に過ごすために自己を調整したり、互いが納得するように考えたりしながら遊びをつくる姿につながったと考える。²⁴

²⁰ 長期的な育ちを支えているからこそ「待つ」援助ができる (b)

²¹ 幼児の力を信じて、じっくり待つことの大切さ (a) 幼児同士のかかわりを信じて待つことが育ちにつながる (f)

²² 「協同」の育ちを意識している。小学校についていく大切なことだと思った (c)

²³ カンファレンスを通して共通の思いで援助する大切さ (f)

²⁴ 子どもを信じて待つことが子どもたちの育ち、成長につながる (f) 3・4・5歳クラスが同じ方向性で援助を積み重ね、つなげてきたことがⅫ期の子どもの姿に現れている (g)